大阪狭山市文化財報告書12

大阪狭山市内遺跡群
発掘調査概要報告書4

1994年3月

大阪狭山市教育委員会

大阪狭山市文化財報告書12

大阪狭山市内遺跡群
発掘調査概要報告書4

1994年3月

大阪狭山市教育委員会

序　文

大阪狭山市内には、府の史跡名勝に指定されております狭山池をはじめとして、多くの文化財があります。本年は狭山池において、鎌倉時代の僧、重源が行なった狭山池改修に関する記述のある記念碑や、古墳時代の石棺などを再度転用して造られた近世の中樋遺構などの重要な発掘調査が行われ、大きな関心を集めました。

このような調査と併行しまして、大阪狭山市教育委員会では、平成２年度より継続して行なっております個人住宅建設に先立つ発掘調査を、本年度も国と大阪府の補助金を受けて実施することができました。

本年度は、狭山藩陣屋跡と東野廃寺と陶邑窯跡群にて調査を行い、多くの成果を得ました。この報告書はこれらの調査結果をまとめたものです。本書が各分野にて研究の一助となれば、まさに望外の喜びです。

本年度の調査におきましては、建築主の皆様ならびに調査地周辺の皆様に多くのご協力を賜りました。厚く感謝申し上げます。また、今後ともの文化財保護に対する御理解と御支援をよろしくお願い申し上げます。

平成６年３月

大阪狭山市教育委員会

教育長　**上　谷　三　郎**

例　　言

1．本書は国庫および府費の補助を受け、大阪狭山市教育委員会が平成５年度 国庫・府費補助事業として大阪狭山市内で実施した、個人住宅等建設に伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査の成果をまとめた概要報告書である。

2．収録した各調査は以下の通りである。

　　1．狭山藩陣屋跡　：93－１区・93－２区・93－３区
　　2．東野廃寺　　：93－１区
　　3．陶邑窯跡群　　：今熊１号窯（93－１区）・93－２区

　なお、現地調査は、１の93－３区を大阪狭山市教育委員会社会教育課主事市川秀之が担当、１の93－１区と93－２区・２・３を同植田隆司が担当した。

3．現地調査に当たっては、桜渕繁太郎・高林正男・廣瀧美智子・中野圭子をはじめとする諸氏の協力を得た。

　遺構・遺物の整理作業は、植山てる江・五福實幸・中尾美津江・扶川陽子が行なった。また、仲井光代・吉本和美・山崎和子・笹岡裕里子・塔本真知子をはじめとする諸氏の協力を得た。

　遺構写真の撮影は各担当者が行い、遺物写真の撮影については阿南辰秀氏の協力を得た。

4．本書の編集は植田が行い、市川がこれを補佐した。執筆は、狭山藩陣屋跡 93―３区および93－２区出土遺物を市川が、その他を植田が行なった。

本　文　目　次

(頁)

序　文　　大阪狭山市教育委員会教育長　上谷三郎
例　言
はじめに……1
1．狭山藩陣屋跡　93－1区……3
　　93－2区……5
　　93－3区……13
2．東野廃寺　93－1区……14
3．陶邑窯跡群　今熊1号窯（93－1区）……16
　　93－2区……46

挿　図　目　次

第1図　大阪狭山市周辺の地形と遺跡分布……2
第2図　狭山藩陣屋跡調査区位置図……4
第3図　狭山藩陣屋跡93－1区遺構平断面図……4
第4図　狭山藩陣屋跡93－2区遺構平断面図……6
第5図　狭山藩陣屋跡93－2区土坑出土遺物(1)……7
第6図　狭山藩陣屋跡93－2区土坑出土遺物(2)……8
第7図　狭山藩陣屋跡93－2区土坑出土遺物(3)……9
第8図　狭山藩陣屋跡93－3区　調査箇所と土層断面図……13
第9図　東野廃寺調査箇所位置図……15
第10図　東野廃寺93－1区遺構平断面図……15
第11図　今熊1号窯調査区位置図……16
第12図　今熊1号窯［ＩＫ1］焼成部平面図・土層断面図……19
第13図　今熊1号窯第1次焼成床面出土遺物［ＩＫ1－1］……21
第14図　今熊1号窯第2次焼成床面出土遺物(1)［ＩＫ1－2］……22
第15図　今熊1号窯第2次焼成床面出土遺物(2)［ＩＫ1－2］……23
第16図　今熊1号窯第3次焼成床面出土遺物［ＩＫ1－3］……24
第17図　今熊1号窯焼成部攪乱坑内出土遺物……25
第18図　今熊1号窯焼成部流入土内出土遺物……26
第19図　杯身のたちあがり高とその角度……28
第20図　杯身の法量……28
第21図　陶邑窯跡群93－2区調査区位置図・調査箇所と土層断面図……46

表　目　次

(頁)

第１表　狭山藩陣屋跡93―２区土坑出土遺物観察表……10
第２表　今熊１号窯第１次焼成床面出土遺物観察表……31
第３表　今熊１号窯第２次焼成床面出土遺物観察表……33
第４表　今熊１号窯第３次焼成床面出土遺物観察表……38
第５表　今熊１号窯焼成部攪乱坑内出土遺物観察表……41
第６表　今熊１号窯焼成部流入土内出土遺物観察表……44
第７表　報告書抄録……47

図　版　目　次

図版１　狭山藩陣屋跡93－２区（ａ．遺構、ｂ．遺物出土状況）
図版２　狭山藩陣屋跡93－１区・東野廃寺93－１区
図版３　狭山藩陣屋跡93－２区土坑出土遺物
図版４　狭山藩陣屋跡93－２区土坑出土遺物
図版５　今熊１号窯(1)（ａ．焼成部土層断面、ｂ．第１次焼成床面）
図版６　今熊１号窯(2)（ａ．第２次焼成床面、ｂ．第２次焼成床面遺物出土状況）
図版７　今熊１号窯(3)（ａ．第３次焼成床面、ｂ．第３次焼成床面遺物出土状況）
図版８　今熊１号窯(4)（第３次焼成床面遺物出土状況）・陶邑窯跡群93－２区
図版９　今熊１号窯出土遺物(1)（第１次焼成床面・第２次焼成床面）
図版10　今熊１号窯出土遺物(2)（第２次焼成床面・第３次焼成床面）
図版11　今熊１号窯出土遺物(3)（第３次焼成床面・焼成部攪乱坑内）

はじめに

大阪狭山市は、ベッドタウン化された昭和40年代以降に急激な人口増加をみた。近年においては、その頃の勢いは無いとはいえ、住宅開発は引続き盛んである。また、その頃に建設された木造住宅の建替えや増改築が行われる時期にさしかかっていることもあり、これらに伴う埋蔵文化財の発掘届の提出件数にも減少の兆しはみられない。この傾向は今後も持続するものと考えられる。

本報告書においては、本年度に大阪狭山市教育委員会が実施した、市内における個人住宅建設等に伴う発掘調査の成果を報告する。ただし、狭山ニュータウンなど既に大規模な造成工事が行われた箇所における住宅の新築・増改築に際しては、本市教育委員会は立会調査を行い、これに対応している。立会調査を行なった結果、遺構・遺物が検出されなかった事例が多数あったが、これらについては報告を省略する。

ところで、大阪狭山市域の遺跡分布と地形分類は第１図の通りである。本市は読んで字のごとく、西側の泉北丘陵と東側の羽曳野丘陵に挟まれた地形で、この両丘陵の間に幾筋かの南北方向の谷筋が走っている。これらの谷筋から、旧石器時代・縄文時代の打製石器が幾度か採集されている[1)]。

弥生時代の遺跡としては、市域南部の高地において、弥生時代後期の集落跡が検出された、茱萸木遺跡がわずかに知られるのみである。

古墳時代中期に入ると、泉北丘陵を中心にその造営が展開された陶邑窯跡群が東方へとその域を拡大した結果、本市域西端に相当する陶器山丘陵とその北側の高位段丘の斜面に須恵器窯が数多く築かれた。古墳時代後期の６世紀中葉～後葉になると、陶邑窯跡群は、さらに東方へとその域を拡大し、本市域の至るところの中位段丘崖に窯を築き、須恵器生産を行う。７世紀前葉～中葉になると、窯焼きの燃料である薪や窯を築く斜面が不足したようであり、６世紀末～７世紀前葉に築造されたばかりの狭山池の池の水を堰き止める堤の外側斜面のような不適当な箇所にまで窯を築くようになる[2)]。

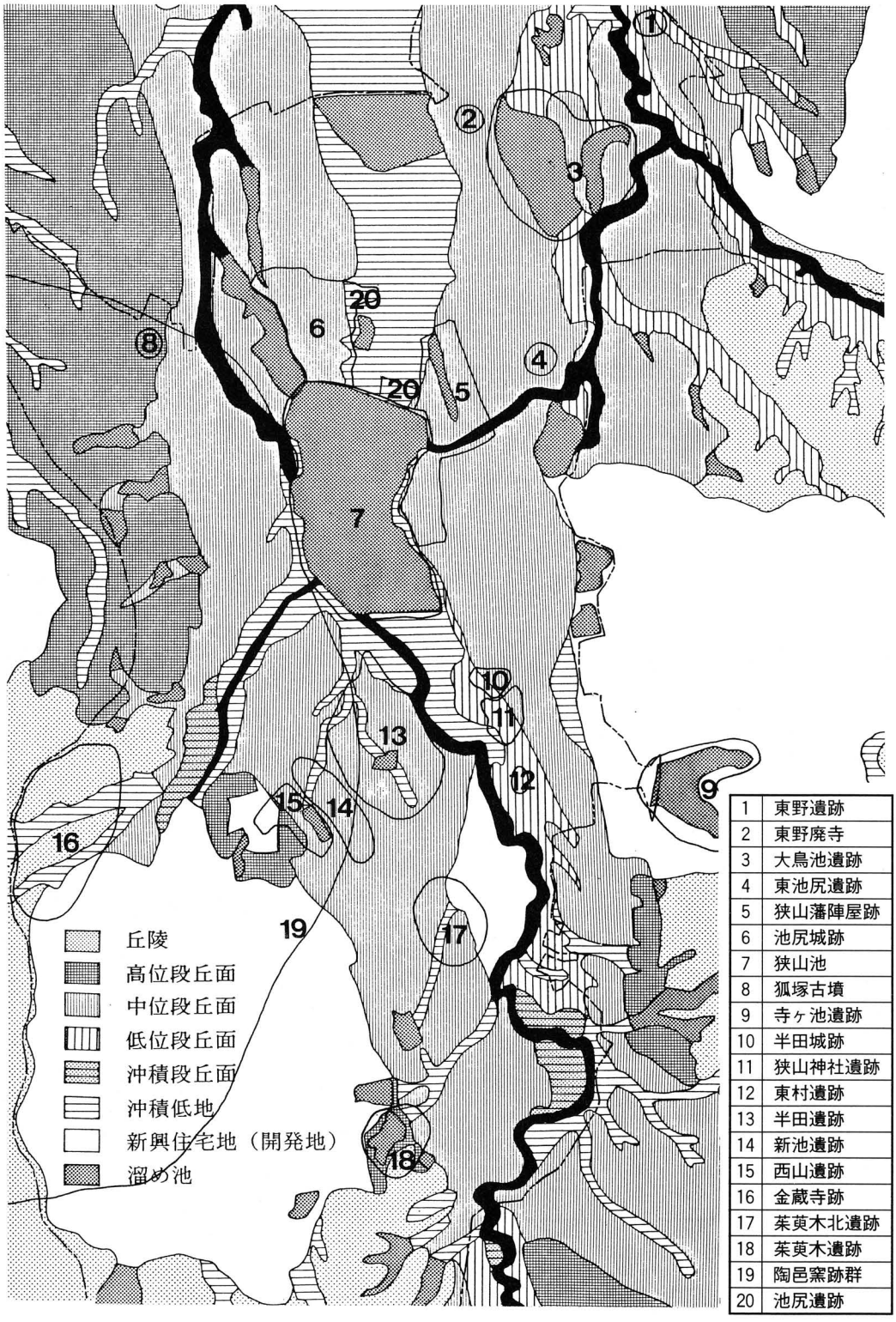
この狭山池が築かれた主谷の東西に広がる中位段丘上に、東野廃寺・池尻城跡・狭山神社遺跡・狭山藩陣屋跡などの古代・中世・近世の諸遺跡が成立している。

最近では、個人住宅建設を中心とする開発が、こうした中位段丘上・高位段丘上で盛んに行われている。このため、陶邑窯跡群の旧地形を保つ箇所や狭山藩陣屋跡での調査件数が近年増加の傾向にある。本報告書に記載した調査成果も、この２遺跡を中心としたものである。

註記

１）西野良政氏・上野正和氏・西岡勝彦氏の採集資料などがある。
上野正和「狭山の考古学研究と私」『さやま誌 大阪狭山市文化財紀要』創刊号、1992

２）狭山池調査事務所、1993年・1994年調査



1	東野遺跡
2	東野廃寺
3	大鳥池遺跡
4	東池尻遺跡
5	狭山藩陣屋跡
6	池尻城跡
7	狭山池
8	狐塚古墳
9	寺ヶ池遺跡
10	半田城跡
11	狭山神社遺跡
12	東村遺跡
13	半田遺跡
14	新池遺跡
15	西山遺跡
16	金蔵寺跡
17	茱萸木北遺跡
18	茱萸木遺跡
19	陶邑窯跡群
20	池尻遺跡

第１図　大阪狭山市の周辺の地形と遺跡分布（豊田兼典氏原図作成）

1．狭山藩陣屋跡

狭山藩陣屋跡は、狭山池の東側の中位段丘上に立地している。豊臣秀吉によって小田原城を落とされた戦国大名北条氏の末裔が、近世初期にこの地に陣屋を開き、以後明治維新に至るまでの間、一貫して陣屋が営まれた。

明治以降、陣屋の域内における景観は大きく変化し、現在ではほぼ全体が住宅地となっている。近年、既存住宅の建替えや、小規模の再開発が増えつつあるため、狭山藩陣屋跡の域内における埋蔵文化財発掘調査の数が増大している。これらの発掘調査の結果、少しずつではあるものの、狭山藩の陣屋の構成が明らかになりつつある。

本報告書にて報告を行なっている本年度の調査区は、第２図にその位置を示している。

狭山藩陣屋跡93―１区発掘調査報告

狭山藩陣屋跡93－１区は、大阪狭山市狭山四丁目2494番地９号・10号に所在する。

本調査区は、幕末から明治初頭の陣屋の配置を表す「狭山藩陣屋絵図」[1)]では、陣屋の上屋敷にあった撃剣道場の南西端もしくはその西側の田中家の屋敷地内に相当する。

調査は開発用地の西半部分で、南北 4.1m・東西 1.6mの調査区を設定して、平成５年５月17日から同月19日まで行なった。

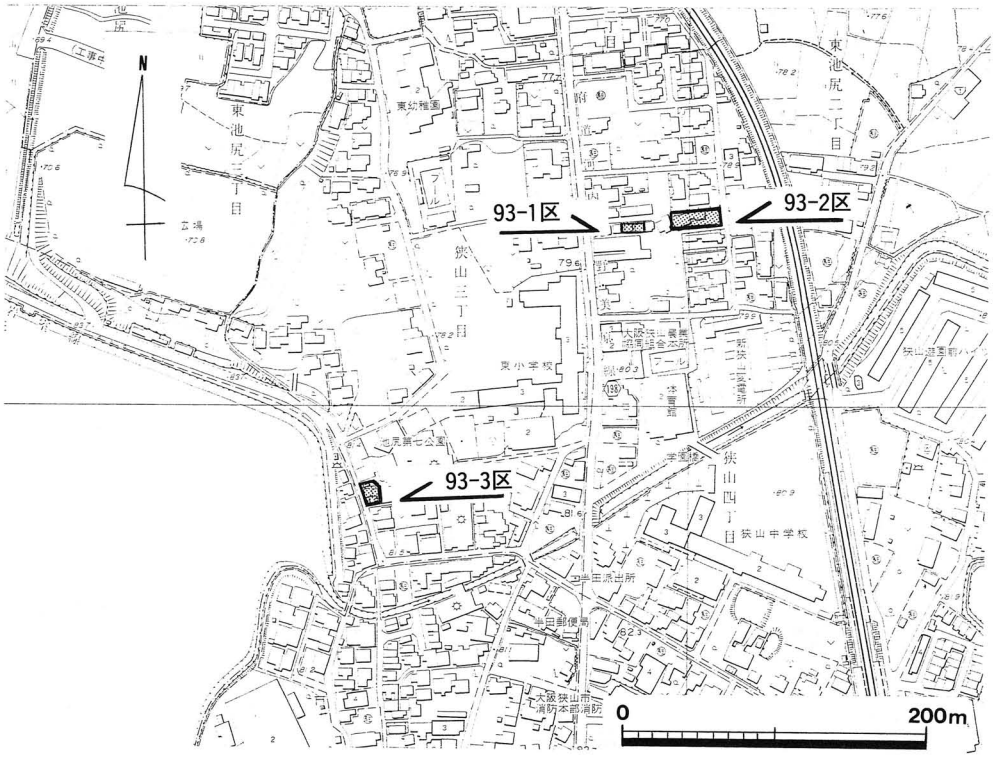
現地表面から約20cmの深さまでガラ混じりの整地層が続き、その直下で、厚さ７cmの明黄褐色砂質土層の上面を遺構面とする、狭山藩陣屋跡上層遺構面[2)]があらわれた。上層遺構面では、調査区北端でピットを３と平瓦を立てた列を、調査区南端から 1.3m北でピットを１検出した。ピットの深さはいずれも10cm～20cm程度である。

上層遺構面のベース層の直下は淡褐灰色砂質土層が約６cmの厚さで続き、その直下が上面を遺構面とする明黄灰色粘砂土層となる。この遺構面が狭山藩陣屋跡下層遺構面に相当するものと思われる。この遺構面では土坑状の落ち込みが４箇所、調査区南端付近でピットが１、調査区南北方向に廻り込みながらのびる溝が１本検出された。溝の深さは約16cmを測り、落ち込みの深さは10cm以下、ピットの深さは８cmを測る。

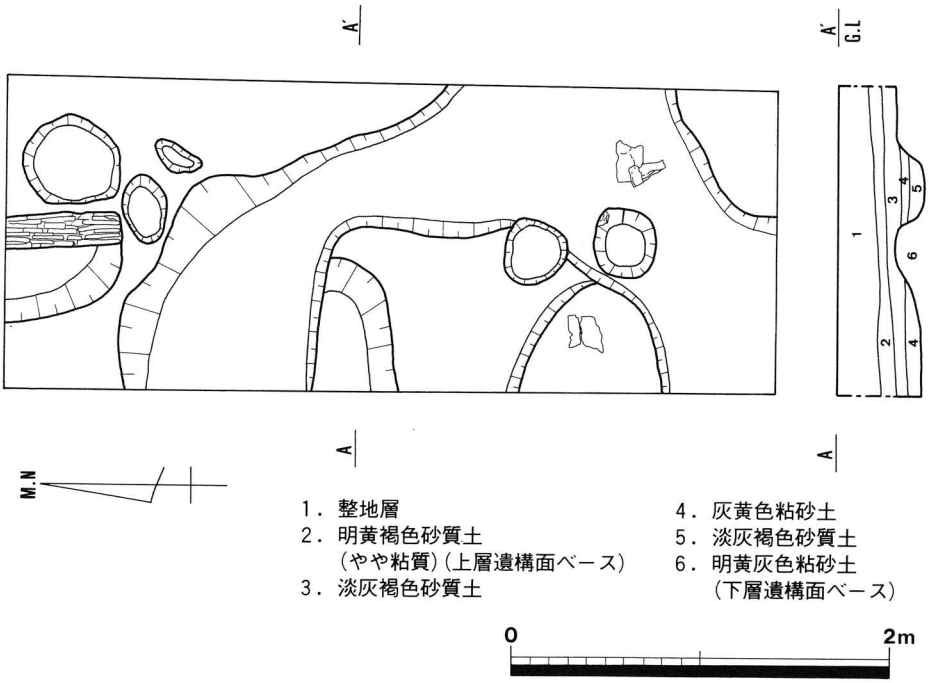
註記

1）都築家所蔵のこの絵図は下記の文献に掲載している。
大阪狭山市教育委員会「大阪狭山市内遺跡群発掘調査概要報告書３」『大阪狭山市文化財報告書』９、1993年
大阪狭山市教育委員会・狭山池調査事務所『絵図に描かれた狭山池』1992年

2）狭山藩陣屋跡上層遺構面と下層遺構面の２面は上屋敷御殿周辺にて特に顕著に分層しうる。上下２層の間には、淡褐色砂質土や天明年間の大火事に伴うと考えられる焼土層・灰層が間層として検出されることが多い。



第２図　狭山藩陣屋跡調査区位置図



1．整地層
2．明黄褐色砂質土
　（やや粘質）（上層遺構面ベース）
3．淡灰褐色砂質土
4．灰黄色粘砂土
5．淡灰褐色砂質土
6．明黄灰色粘砂土
　（下層遺構面ベース）

第３図　狭山藩陣屋跡93―１区　遺構平断面図

狭山藩陣屋跡93—2区発掘調査報告

陣屋跡93－2区は、大阪狭山市狭山四丁目2455番地1号・2454番地1号に所在する。本調査区は、「狭山藩陣屋絵図」では撃剱道場の南東部分とその東側の池田家の屋敷地内に相当すると考えられ、93－1区から約25m東方、92－5区[1)]とは道路を間に挟んで隣接し、約10m西方に位置する。調査は開発用地の西半部分で、南北2.9m・東西10.9mの本調査区と、その西半部北側に南北4.0m・東西2.0cmの拡張区を設定して実施した。

現地調査は、平成5年9月9日から同月17日まで行なった。

(1)遺構と層序

現地表面から約25cmの深さまでガラ混じりの整地層が続き、その下層に、厚さ約50cmの淡黄色砂質土層がある。この層の直下で淡黄灰色砂質土層の上面が表れ、この面で遺構を確認した。調査区西端近くでは、南北方向に並行してのびる2本の溝を検出した。2本の溝はそれぞれ幅約30cm・深さ約20cmを測り、2本の溝の間隔はその上端で約1.0mを計測する。なお、溝埋土中からは遺物は検出されなかった。この溝は、開発用地南側の宅地の東端境界線の北方延長線上に位置するために、「狭山藩陣屋絵図」における撃剱道場と池田家屋敷地の境に相当する可能性があり、その場合、双方の敷地間を隔する塀や垣根等の施設に伴う溝と認識される。また、調査区の中央付近で、掘り込みの上端の平面形が方形を呈し、深さ45cmを測る土坑を検出した。

(2)遺　　物

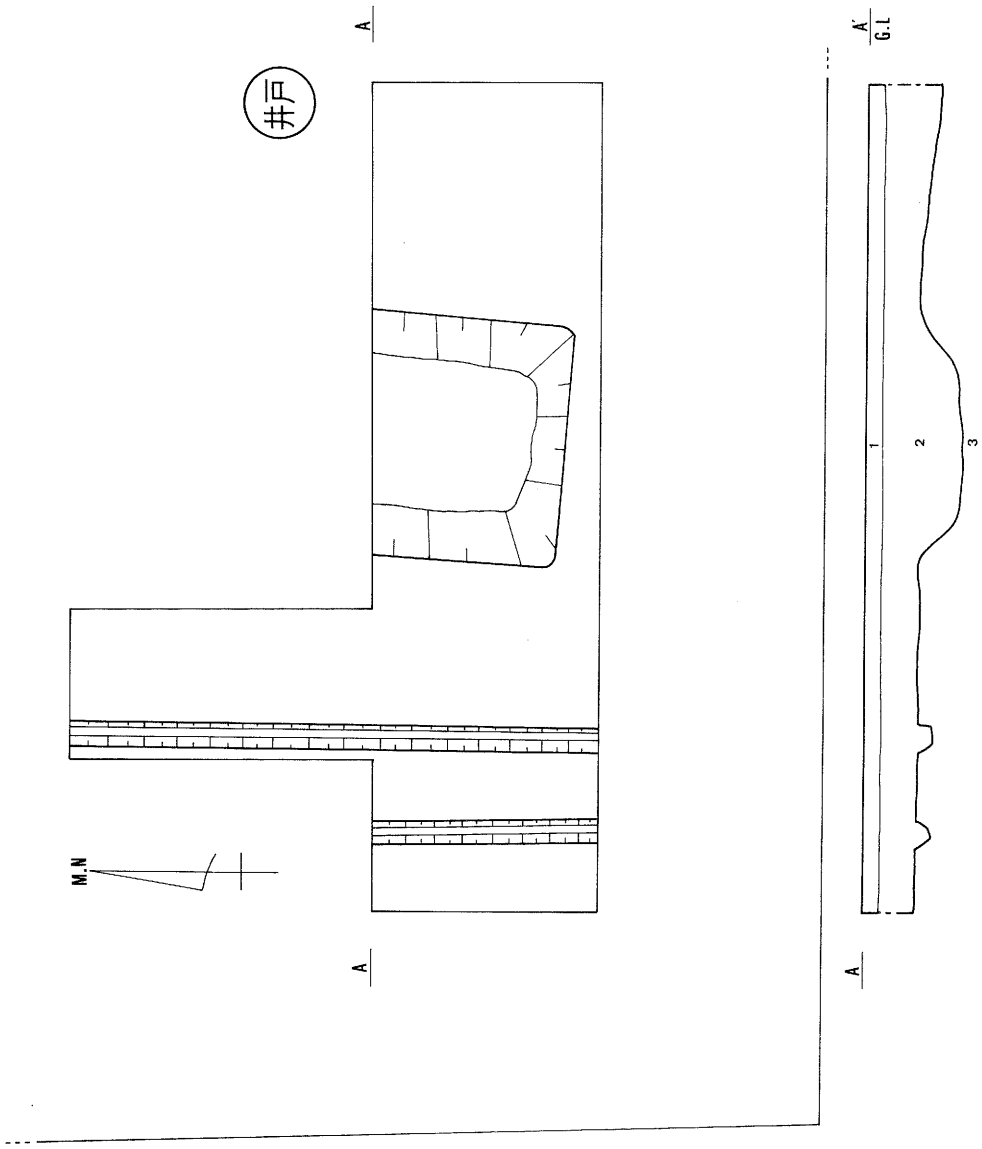
本調査区より出土した遺物の詳細については第1表に述べる通りであるので、ここではその概要のみを報告することとする。この調査区の遺物はすべて土坑より出土したものである。産地は肥前系のものが圧倒的に多いが、堺産、瀬戸美濃系のものも含まれている。図にあげた遺物の内、26のミニチュア硯、27の土師小皿は、28の土師質壷の中に入った状態で出土している。壷の内面や、小皿の表面はススが真っ黒に付着しており、この壷のなかに皿をいれ灯をともしていたことが想像できる。ミニチュアの硯の機能は現在のところ不明である。次にこの土坑の遺物の年代については、堺すり鉢はいずれも18世紀後半から19世紀始めのものであり、瀬戸美濃系のものも19世紀前半のものが中心である。また肥前系の製品も若干18世紀のものがあるが、大半は19世紀前半のものである[2)]。遺構の年代も19世紀前半とみてほぼ間違いがないだろう。

註記

1）「大阪狭山市内遺跡群発掘調査概要報告書3」『大阪狭山市文化財報告書』9、1993年

2）白神典之「堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告」『堺市文化財調査報告書37冊』1993年

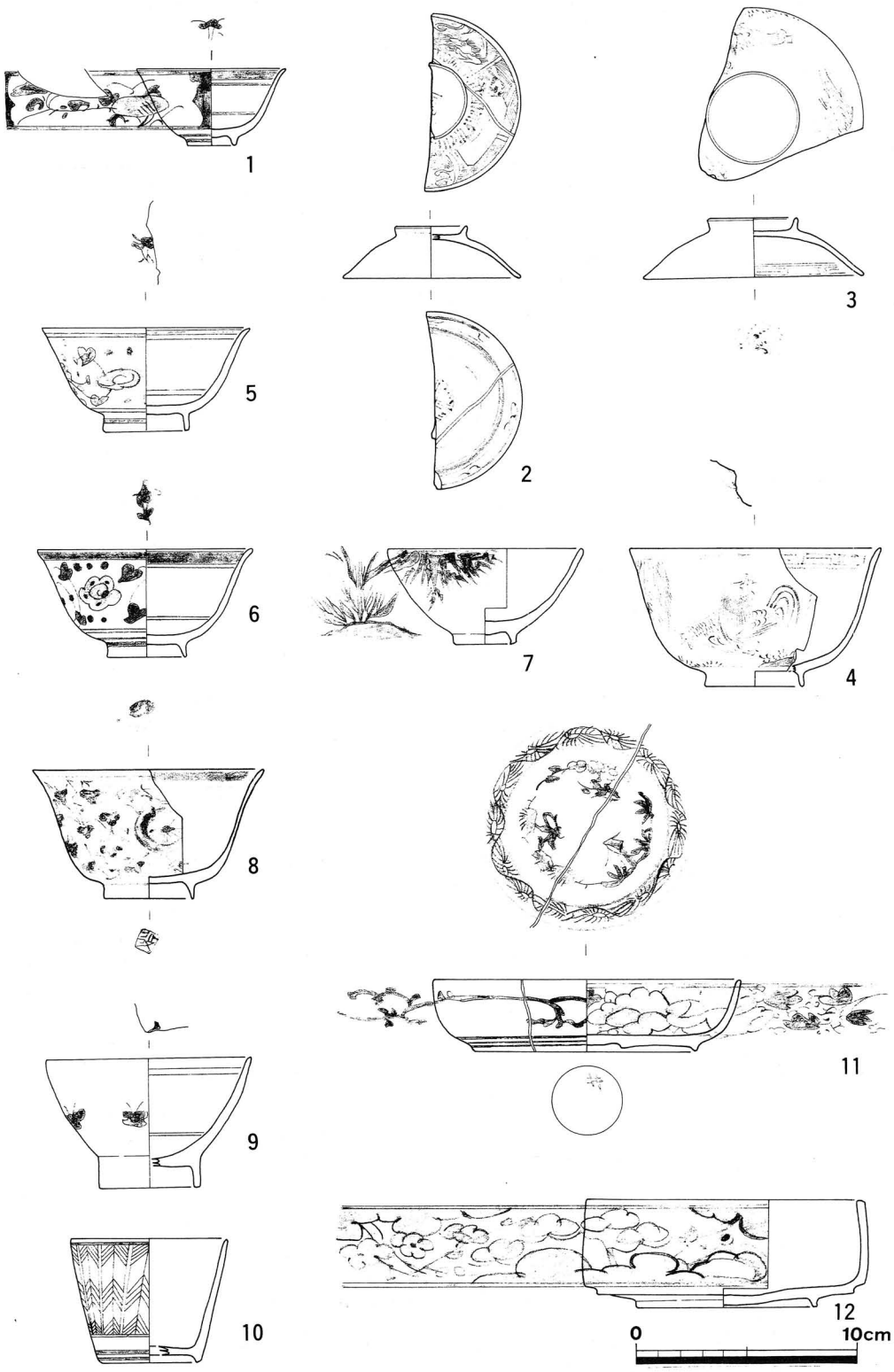
大橋康二『肥前陶磁』ニューサイエンス社、1989年



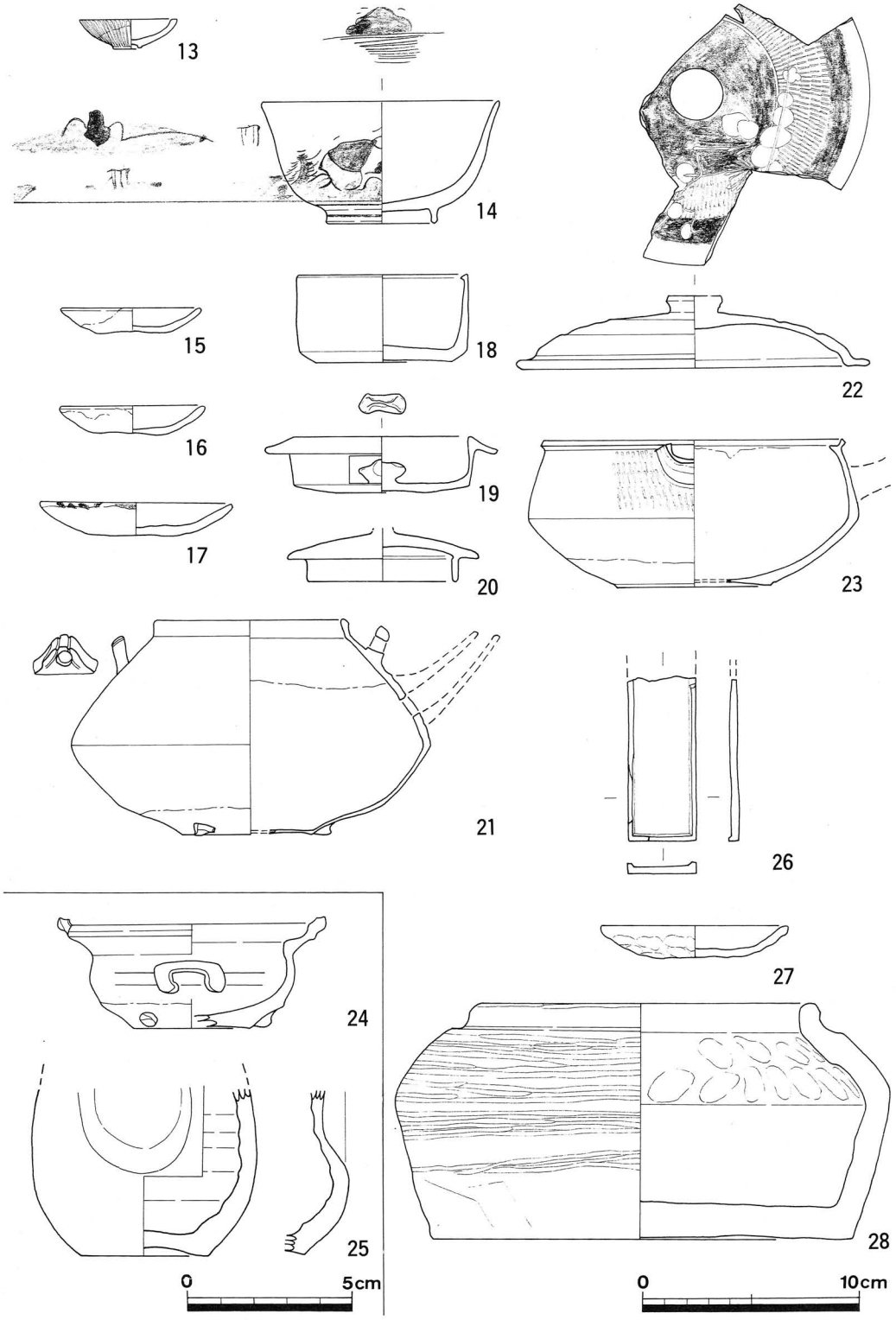
1．整地層
2．淡黄色砂質土
3．淡黄灰色砂質土

0　5m

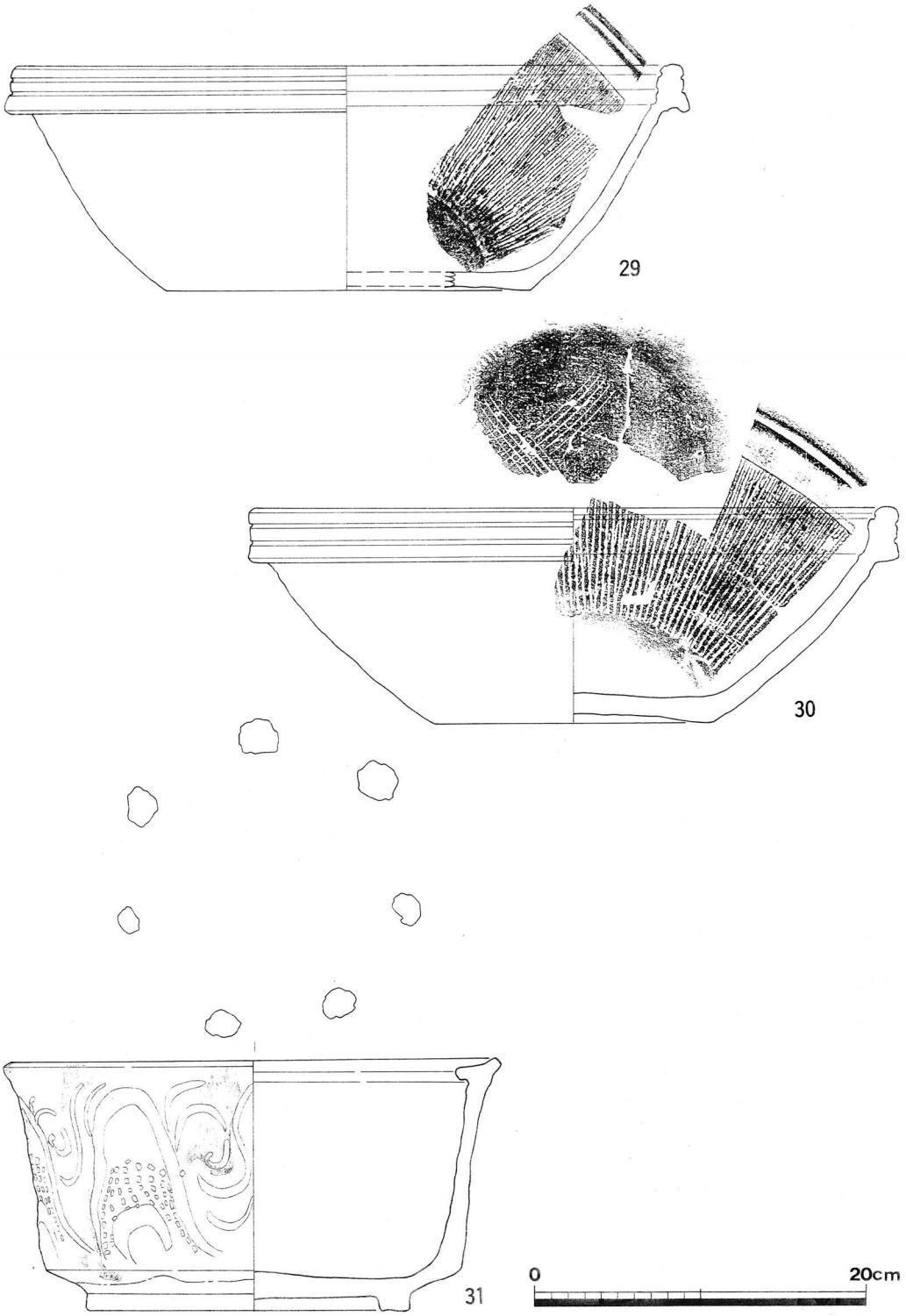
第４図　狭山藩陣屋跡93―２区遺構平断面図



第５図　狭山藩陣屋跡93―２区　土坑出土遺物(1)



第６図　狭山藩陣屋跡93―２区　土坑出土遺物(2)



第７図　狭山藩陣屋跡93―２区　土坑出土遺物(3)

—第１表— 狭山藩陣屋跡９３－２区土坑出土遺物観察表

器種	図面図版	法量（cm）	形態の特徴	装飾技法	製作地・年代
染付碗	5－1	口径 6.7 器高 3.5	高台よりなだらかに立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。 口縁部付近１／３が欠損。	文様は見込み部が草花文。外面も草花文。全体に透明釉を施す。	肥前系磁器。
小碗蓋	5－2 3－5	口径 8.1 器高 2.4 つまみ径 3.2	口縁部はやや外反する。つまみもすこし外反。全体の１／２が欠損。焼継痕あり。	文様は外面は雷文、雨龍文など内面は波頭文。外面の見込みに銘あり。	肥前系磁器。
中碗蓋	5－3	口径 11.0 器高 2.7 つまみ径 4.0	口縁部はやや外反する。つまみもやや外反。全体の２／３が欠損。	文様は外面が垂れ柳に鶏。内面外周は雷文、見込み部に草文。	肥前系磁器。 ４と対。
染付碗	5－4	口径 11.3 器高 6.3	口縁部はわずかに外反する。底部高台はほぼ垂直に立つ。全体の１／２が欠損。	文様は外面が垂れ柳に鶏。口縁部に二重線。内面外周には雷文。見込み部に草文。	肥前系磁器。 ４と対。
染付碗	5－5	口径 9.6 器高 4.9	高台より緩やかに立ち上がり、端部がやや外反する。端反型。 １／６が欠損。	文様は外面が草花文、見込み部は雲花文。	肥前系磁器。
染付碗	5－6	口径 9.6 器高 4.9	高台より緩やかに立ち上がり、端部がやや外反する。端反型。 １／８が欠損。	文様は外面が草花文、見込み部は雲花文。	肥前系磁器。
染付碗	5－7	口径 8.8 器高 4.4	高台よりほぼまっすぐ外側に立ち上がる。高台は高い。広東碗。 １／２が欠損。	文様は外面が笹文。見込みにはなし。	肥前系磁器。
染付碗	5－8	口径 10.5 器高 5.9	高台より緩やかに立ち上がり、端部が外反する端反型。 ２／３が欠損。	文様は外面が草花文。見込み部にも草花文。高台内に銘款有り。「福」か。	肥前系磁器。
染付碗	5－9	口径 9.3 器高 5.9	高台よりほぼまっすぐ外側に立ち上がる。高台は高くほぼ直立する。広東碗。 ２／３が欠損。	文様は外側が蝶文。見込み部にも文様があるが大半が欠損しており、不明。	肥前系磁器。
そば猪口	5－10 3－2	口径 7.1 器高 5.7	高台からほぼ直線的に、少し外側に向かって立ち上がる。高台は非常に低い。腰輪高台。 ２／３が欠損。	文様は外面は矢柄。内面はなし。	肥前系磁器。
染付皿	5－11 3－7	口径 13.8 器高 3.3	高台より緩やかに立ち上がった後直立する。高台は蛇ノ目凹型高台。焼き継ぎ痕があり、高台内に焼き継ぎ印「井」が記されている。 １／５が欠損。	文様は外面は連続唐草文。内面は花唐草。見込み部は松竹梅。	肥前系磁器。
染付段重鉢	5－12	口径 12.6 器高 4.9	体部はまっすぐ立ち上がり、口縁端部はやや内に傾いた面をつくる。底部の外周には段が回る。高台の径は底部の２／３程度。 １／５が欠損。	文様は外面に松梅文。	肥前系磁器。
紅猪口	6－13 3－6	口径 4.5 器高 1.4	形状は菊花型。型内成形。		肥前系白磁。

器種	図面図版	法量（cm）	形態の特徴	装飾技法	製作地・年代
染付碗	6－14	口径 11.0 器高 5.7	高台から少し外に伸びながら立ち上がる。端部はわずかに外反。丸型。 1／3が欠損。	文様は外面は山水風景。見込み部にも風景。海と水鳥か。	肥前系磁器。
土師皿	6－15	口径 6.5 器高 1.1	ロクロ成形ののち外面は回転ナデ、底部は回転糸切り。 色調は乳白色。胎土は密で、クサリ礫、微小な砂粒を含む。	内面のみ透明釉をほどこす。	
土師皿	6－16	口径 6.8 器高 1.3	ロクロ成形の後、外面は回転ナデ、底部は回転糸切り。 色調は赤褐色。胎土にはクサリ礫、微小砂粒を含む。	内面のみ透明釉を施す。	
土師皿	6－17	口径 9.0 器高 1.5	ロクロ成形の後、外面は回転ナデ、底部は回転糸切り。 色調は赤褐色。胎土はやや粗く、微小な砂粒を含む。	内面のみ透明釉を施す。	口縁部内側にススが付着。
火入	6－18	口径 9.8 器高 4.1	ロクロ成形の後、内外面とも回転ナデ。底部は回転糸切りの後、外周部のみヘラ削り。 色調は乳白色で、底部以外は透明釉を施す。	文様はなし。	内面底部に焼け跡。 瀬戸美濃系陶器か。
蓋	6－19	口径 10.8 器高 3.6	ロクロ成形の後、回転ナデ。底部は回転糸切り。中央にツマミあり。口縁から外側やや下方に端部が伸びる。内面のみ黒釉を施す。	文様はなし。	形態から考えてはめこみ式の蓋か。 産地不明。陶器。
蓋	6－20	口径 10.8 器高 2.6	ロクロ成形の後、回転ナデ。貼り付け。 ツマミ部分は欠損している。上面のみ施釉。	文様はなし。	京都産陶器。 急須の蓋か。
土瓶	6－21	口径 9.0 器高 10.0	算盤珠型を呈す。底は平底で3ケ所に団子状の脚が付く。注口部分は欠損。肩に耳が付く。 ロクロ成形の後、回転ナデ。外面および内面口縁部のみ施釉。底部には施釉せず、ススが付着。	文様はなし。	瀬戸美濃系陶器か。
蓋	6－22	口径 16.5 器高 3.4	山型の蓋。端部は水平に伸びる。ツマミは断面長方形。	トビカンナ痕有り。鉄化粧。 白色の釉で梅花を描く。	瀬戸美濃系陶器。 行平鍋の蓋。
行平	6－23	口径 14.1 器高 6.8	内面に透明釉を施す。外面上半に鉄化粧。トビカンナ痕あり。底部は露胎。 1／2が欠損。		瀬戸美濃系陶器。 行平鍋。
ミニチュア土鍋	6－24	口径 4.8 器高 2.1	口縁2方向に耳が付く。底部には3箇所に団子状の脚が付く。内部、外部の上半分に鉄釉を施こす。型つくりか。		産地不明。
ミニチュア徳利	6－25	口径 不明 残存高 3.2	回転ナデの後、指押さえで成形。	文様はなし。	産地不明。

器種	図面 図版	法量（cm）	形態の特徴	装飾技法	製作地・年代
ミニチュア硯	6－26 4－11	幅 3.1 残存長 7.6	小型で非常に薄い。海と陸の区別が不明瞭。		使用痕あり。 28の中に入った状態で出土。
土師皿	6－27 4－10	口径 8.6 器高 1.5	裏面に指押さえ痕あり。全面に真っ黒にススが付着する。 完形。		28の中に入った状態で出土。 灯明皿。
壷	6－28 4－9	口径 15.7 器高 10.9	底は平底。肩部は緩やかに内彎。口縁部は直立する。 色調は赤褐色。 内面には真っ黒に煤が付着。		灯明壷。 産地不明。
すり鉢	7－29	口径 39.6 器高 13.6	口縁外帯は3段。内側に凸帯。 すり目は口縁付近で5mm間隔。 1／5が残存。		堺産。
すり鉢	7－30	口径 38.1 器高 13.1	口縁外帯は3段。内側に凸帯。 すり目は口縁付近で7mm間隔。 2／5が残存。		堺産。
水鉢	7－31 4－8	口径 29.4 器高 15.2	半筒型。口縁内部に蓋受けが付く。 見込みに7箇所の胎土目痕あり。	外面に幅の広い流水文が刻まれる。また櫛状の道具で陰刻文。 高台以外全面に灰色釉、緑釉、茶色釉を施す。	瀬戸美濃系陶器。

狭山藩陣屋跡93—3区発掘調査報告

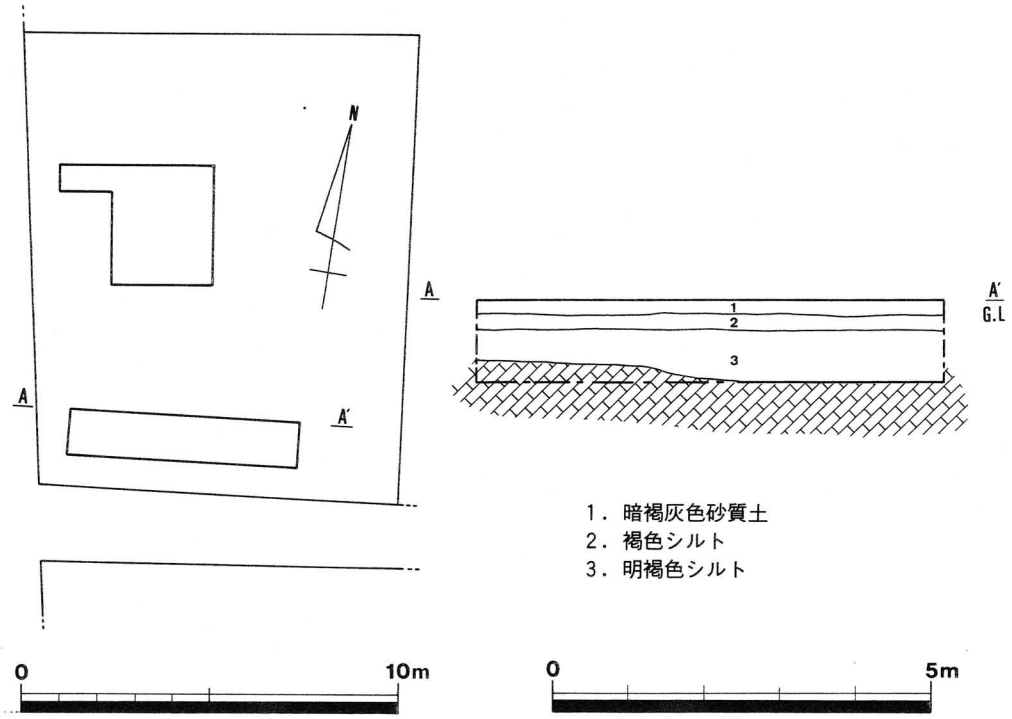
狭山藩陣屋跡93－3区は、大阪狭山市狭山三丁目2415番地1号・2号に所在する。

本調査区は、「狭山藩陣屋絵図」では陣屋上屋敷域内の最南端部分の西半に占地する「元練兵場」の西端の一角にあたる。この箇所は狭山池に隣接しており、狭山池を堰き止める北堤と東除（ひがしよげ）の間の東堤の裾に接している。

狭山池東岸となっている段丘崖がこの付近のみ連続していないことから、池の東方への部分拡張に伴って、近世にこの箇所の池岸へ盛土を施して堤としていると考えうる。この状況は現地の地形を観察することによっても確認できる。

よって、狭山藩陣屋跡練兵場に関連する遺構の有無を確認すると同時に、狭山池東堤の盛土の状態を確認するために、開発用地南端でほぼ東西方向に長さ約6m、幅1.1mの試掘溝を、用地中央西寄りに南北3.2m・東西2.6mの調査区を設定し、調査を実施した。現地における調査は、平成5年12月20日から同月24日まで行なった。

調査区内では平面掘削を行なったものの、遺構らしきものは確認できなかった。試掘構内での土層断面の観察結果は第8図の土層断面図の通りである。これら3層の土層はあきらかに人工の盛土であり、堤の盛土工事にあわせた数回の土盛が、この近辺において行われたと考えられる。1の土層中からは、実測不可能な須恵器片1点・土師器片4点が出土したが、後世に混入した遺物であろうために、盛土が行われた時期を確定しえない。



第8図　狭山藩陣屋跡93—3区調査箇所と土層断面図

2．東野廃寺

東野廃寺は、狭山池の東側の中位段丘上に立地している。東野の蓮光寺一帯において、古くから古瓦が採集され、この蓮光寺境内に塔心礎が残されているために、この付近を東野廃寺と称して、埋蔵文化財包蔵地と認識されている。

以前に出土した単弁蓮華文の軒丸瓦[1)]は、飛鳥時代の様式が残された白鳳期のものと考えられており、蓮光寺周辺の水田の区画がこれを中心として整いをみせていたため、7世紀後半にこの地に寺院が営まれていたと想定されている。

本報告書にて報告を行なっている本年度の調査区は、第9図にその位置を示すように、蓮光寺と府道を隔てた箇所に位置し、寺域の復元に何らかの手掛りをあたえる成果が期待された。

東野廃寺93―1区発掘調査報告

東野廃寺93－1区は、大阪狭山市東野西978番地3号・7号に所在する。

調査は、開発用地のほぼ中央で南北 3.4cm・東西 1.7cmの調査区を設定して、平成5年10月12日から同月20日まで行なった。

開発用地の地表は、府道および西側の宅地よりも 1.5m程度低い。府道を挟んで東側の蓮光寺周辺の水田面の高さも当該地とほぼ同じ程度、周囲よりも低いものとなっている。

現地表面から約10cmまでの深さは現在の畠の耕作土である。その下層は淡黄色砂質土層が15cm程度の厚さでその下の地山面を覆う。地山は明黄色シルトで、この上面が遺構面となっている。

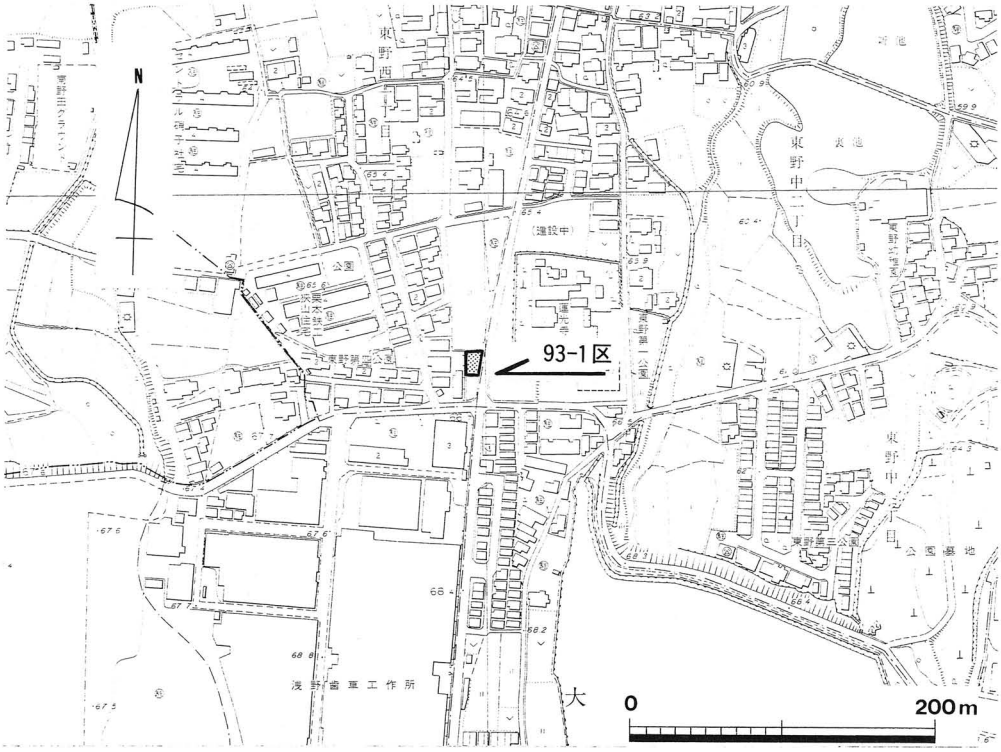
遺構は、調査区北端で短径約 1.0m・長径 1.8m以上の土坑を1検出し、その南側で落ち込みを2、ピットを6検出した。深さはいずれも、 8.0cm～10.0cm程度である。遺物はまったく検出されなかった。

蓮光寺の周囲を取巻く水田があった箇所は、現在は盛土をして共同住宅が建っている。この共同住宅の建設に伴う事前発掘調査を行なった際には、耕土下の流入土内から瓦片等がわずかに出土したが、いずれも混入遺物であり、遺構に伴うものはなかった。同時に、遺構らしきものすら検出されなかった。これらの状況から、蓮光寺周囲の区画が周辺の地表面よりも 1.5m～ 2.0m低いのは、この箇所において近代以降のある時期に土取りなどが行なわれ、削平を受けた結果ではないかと、現段階では考えている。

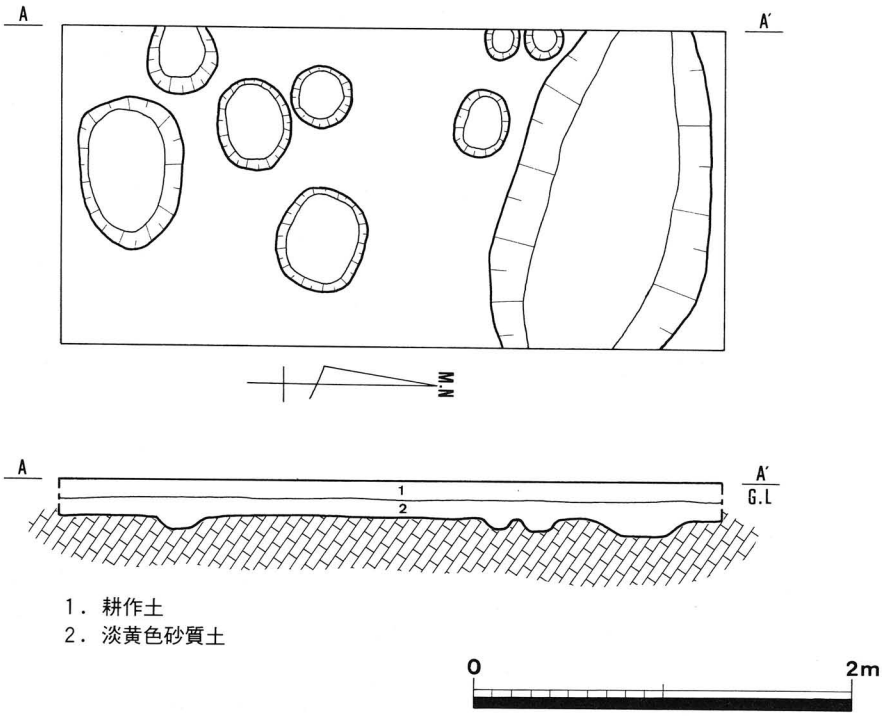
東野廃寺については明らかでない点が多く、今後の調査に期待が寄せられるであろう。

註記

1）狭山町史編纂委員会『狭山町史』第1巻本文編・第2巻史料編、1967年・1966年



第９図　東野廃寺調査区位置図



１．耕作土
２．淡黄色砂質土

第10図　東野廃寺93―１区遺構平断面図

3．陶邑窯跡群

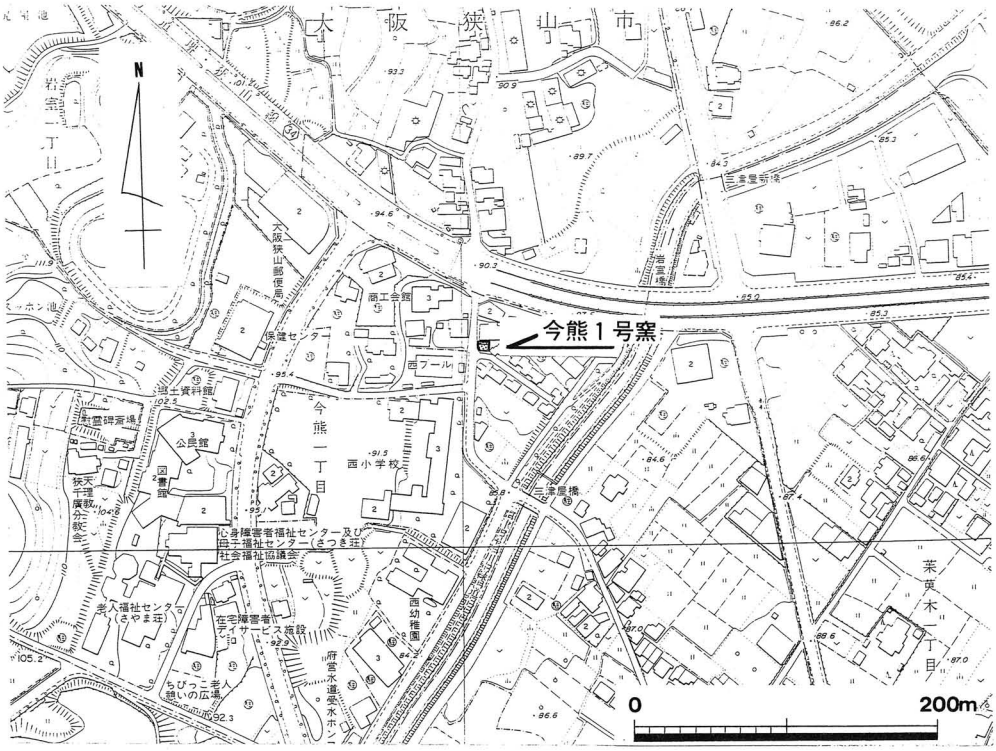
陶邑窯跡群は、現在の行政区画の上では堺市・和泉市・岸和田市・大阪狭山市にわたる広範囲の地域に分布している。本市域内では狭山池西岸以西の地域、すなわち陶器山丘陵およびそれに連なる高位段丘・中位段丘に立地する窯跡を陶邑窯跡群中に含め、『大阪狭山市埋蔵文化財分布図』[1)]で埋蔵文化財包蔵地としている。しかし、実際には狭山池東岸以東の中位段丘崖にも多くの須恵器窯跡が存在しており、これらを陶邑窯跡群中に含めて考える方が妥当である。

本年度は２箇所で発掘調査を行い、１基の窯跡を新規に検出した。この発掘調査を行った位置は第11図・第21図の通りである。

今熊１号窯（ＩＫ１号窯）発掘調査報告

(1)調査の契機と経過

平成５年９月６日、大阪狭山市今熊一丁目７番地１号の一部について、倉庫付個人住宅建設を目的として発掘届が提出された。当該地は陶邑窯跡群内に位置するものの、窯跡の存在が確認されていなかった。しかし、当該地は三津屋川左岸の中位段丘崖を埋め立てて



第11図　今熊１号窯調査区位置図

おり、同じ中位段丘崖で約 200m上流に窯跡の存在が確認されているため、いまだ知られていない窯跡が遺存する可能性も考えられた。また、同発掘届によると、建築が予定される建物は鉄骨３階建てであり、基礎溝は現地表面から 1.1mの深さにまで達し、中位段丘崖もしくは中位段丘面を掘削するものと思われるため、同地点に窯跡が遺存している場合完全に破壊されるおそれがあった。

よって、同年９月16日付、大狭教社第 435号で発掘調査が必要である旨の意見を付して発掘届を大阪府教育委員会文化財保護課に進達した。これに対して、同年10月11日付、教委文第１―4567号で「埋蔵文化財の発掘について」の通知が大阪府教育委員会よりなされたので、大阪狭山市教育委員会は同年11月１日付、大狭教社第30号で「埋蔵文化財発掘調査の通知について」を提出、同年12月１日から発掘調査を実施する予定であった。

ところが、この建設工事の設計業者と施工業者の連絡不行届きに起因して、発掘調査前に施工業者は基礎溝の大半部分を掘削した上に鉄筋の基礎を構築してしまった。発掘調査開始予定日の前日になって、設計業者から本市教育委員会へこの旨の連絡があり、現地へ急行したところ、きわめて遺憾なことに、敷地東側部分の基礎溝によって窯体の用地内での南北端が完全に寸断されていたので、すぐに施工業者に設計業者を通じて工事の停止を求めた。

かろうじて破壊を免れた窯体部分の土が非常に不安定な状態にあり、基礎工事再開とともに崩壊することは確実と判断したため、この箇所について当初の予定通り、12月１日から12月15日まで発掘調査を実施し、遺構の記録保存に努めた。また、遺構・遺物の整理作業を平成５年12月16日から平成６年３月31日まで行なった。なお、この箇所にて検出した遺物について、平成６年２月９日付、大狭教社第47号で大阪府黒山警察署遺失物係に「遺物発見届」を提出、現在本市教育委員会にて保管しているので広くご活用いただきたい。

(2)遺構と層序

今熊１号窯は、ほぼ南東向きに傾斜する中位段丘崖に、主軸をＳ―10°―Ｅとして、傾斜面を斜行して開口していると思われる。

焼成部の一部にあたる窯体は、調査区北側で近世頃のものと考えられる攪乱をうけ、南側では宅地造成前に崖状となっていたらしく、これを土留めするための石積みに伴う攪乱をうけ、東側でも比較的新しい攪乱をうけており、また今回の工事でも一部破壊されたためにかなりひどい遺存状態であった。

この状態において計測しうる窯体の各計測値を記述すると、第２次焼成床面での焼成部の幅は 1.6m、第２次焼成床面からの右側壁の残存高はＡ－Ａ’軸付近で約 0.8m、調査区内において確認しうる窯体の長さは右側壁で12.8mである。(第12図)

本窯の焼成部は中位段丘礫層を半地下式に掘削して構築されており、焼成床面は計３枚

が確認される。第１次焼成床面は暗灰青色砂質土を焼固したもので、中軸付近での厚さが5.0cmを測り、上面に厚さ2.0cmを測る暗褐色砂質土の間層が被覆する。

第２次焼成床面は中軸付近での厚さが8.0cmで、遺存する側壁は、この第２次焼成床面に連続した暗灰青色を呈するスサ混じりの貼壁である。よって、第１次焼成床面使用時における側壁は、第１次焼成の後に窯体の改造が行なわれたであろうために明らかでない。しかし、現存する側壁のすぐ外側が地山であることと、第１次焼成床面直下の地山面が側壁の下方に向けて緩やかに立ち上がっていることから、第１次焼成時の側壁は現存する側壁とほぼ同じ位置に存在したであろうと推察される。

第３次焼成床面は、第２次焼成床面との間に暗褐色砂質土・暗赤橙色砂質土の２枚の間層をはさんで貼床されており、中軸付近での厚さは7.0cmである。

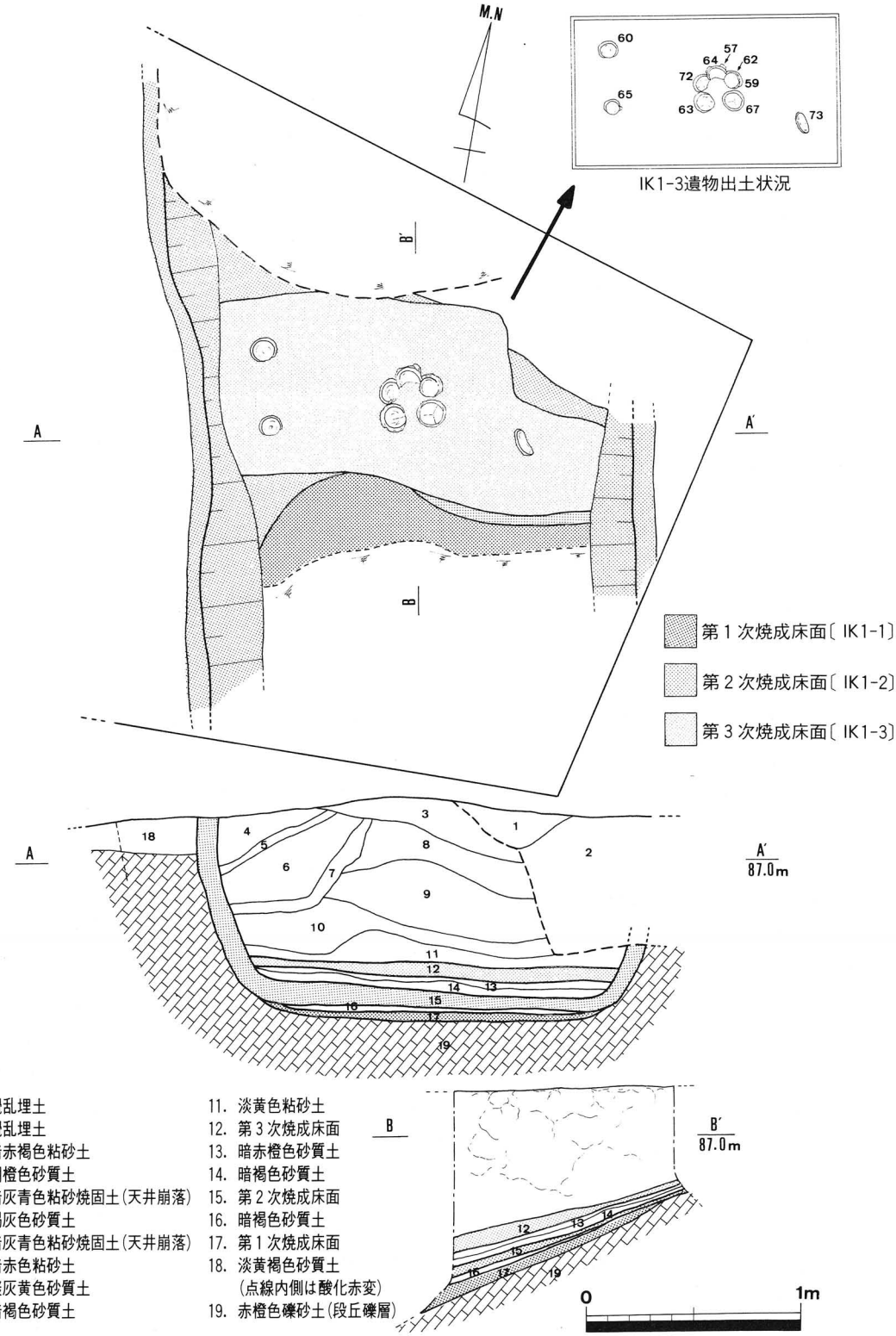
なお、各焼成床面の傾斜角は、第１次焼成床面が22°、第２次焼成床面が18°、第３次焼成床面が15°である。窯体改造以後、貼床を行なう度に床面傾斜角は緩やかなものになっていく状況が看取される。

(3)遺物出土状況

第１次焼成床面上において、焼成時の原位置を保って検出された須恵器は杯蓋１点のみであり、他の須恵器は上層の暗褐色砂質土層中にて床面に密着せずに検出された。このことは、窯体改造に至るまでのある段階において、床面の清掃が徹底されたことを示しているといえよう。

第２次焼成床面上では、現存する床面での最も奥側で、窯体の主軸にほぼ直交して、杯蓋と杯身が直線的に並んで８点検出された。そのうち、左側壁に近い箇所では、杯蓋を内側を上に向け、その上に杯身を正置し、その上に杯蓋を内側を上に向けた重ね焼きの状態で検出した。また、この列とは別に、主軸から右側において、杯蓋３点がいずれも正置の状態で散在して検出された。これら以外の須恵器はいずれも２次移動を受けて、上層の暗褐色砂質土層中に含まれるものである。

第３次焼成床面上では、窯体の主軸付近において、杯身が集中して検出された（第12図）。主軸上の奥寄りで、杯身57が床面上に正置され、その上に杯身64が正置の状態で重ねられていた。これの左側に杯身62が正置され、その上に杯身59が正置の状態で重ねられていた。その手前側に杯身67が正置され、その右側に杯身63が正置され、その奥側で杯身72がやや傾いて、杯身64の体部外面に口縁部を一部接して正置の状態で検出された。この一群は上方より見ると５枚の花弁のように配列されている。また、第３次焼成床面上の他の箇所では、右側壁寄りで杯身60と杯身65が、左側壁寄りで杯身73が、いずれもやや傾いた正置の状態で検出された。ここに記述した以外の須恵器は、床面に密着せず、床面との間に薄い砂層をはさんで出土したので、何らかの２次移動を受けたものと考えられる。



1．攪乱埋土
2．攪乱埋土
3．暗赤褐色粘砂土
4．明橙色砂質土
5．暗灰青色粘砂焼固土(天井崩落)
6．褐灰色砂質土
7．暗灰青色粘砂焼固土(天井崩落)
8．暗赤色粘砂土
9．淡灰黄色砂質土
10．暗褐色砂質土
11．淡黄色粘砂土
12．第３次焼成床面
13．暗赤橙色砂質土
14．暗褐色砂質土
15．第２次焼成床面
16．暗褐色砂質土
17．第１次焼成床面
18．淡黄褐色砂質土
(点線内側は酸化赤変)
19．赤橙色礫砂土(段丘礫層)

第12図　今熊１号窯［ＩＫ１］焼成部平面図・土層断面図

(4)遺　　物

①第１次焼成床面出土遺物［ＩＫ１－１］（第13図、図版９－１～６、第２表）

第１次焼成床面上およびその被覆土中から検出された遺物は、須恵器蓋杯の杯蓋９点・杯身９点・無蓋高杯１点である。

杯蓋１の天井部と体部の境界付近に鈍い凹線がみられ、この杯蓋１を含めた５点の杯蓋口縁部内面にあまい段の形成がみられるなど、やや古い特色を残した須恵器が目立つ。

また、杯蓋２の口縁部外面には、ハケ状工具による調整痕が確認できる。このハケ目は上下２段にナナメ方向に施され、上段を右下がりに施したのち、下段を左下がりに施している。このハケ目調整ののちに回転ナデ調整を施しており、ハケ目の一部はこのためにナデ消されている。このように、成形・調整段階においてロクロ回転を用いない工程が、陶邑窯跡群中のこの時期の窯においても採られている[2)]。この事実は、陶邑の拡大化にともなって、土師器を製作しうる在地の人間を須恵器製作工人集団に組み入れていった状況を示す証拠の一つではなかろうか。

総数19点のうち、16点の資料が１／２未満の残存であり、この床面の最終使用段階の片付けが徹底的に行われたものと思われる。

②第２次焼成床面出土遺物［ＩＫ１－２］（第14・15図、図版９・10－７～14、第３表）

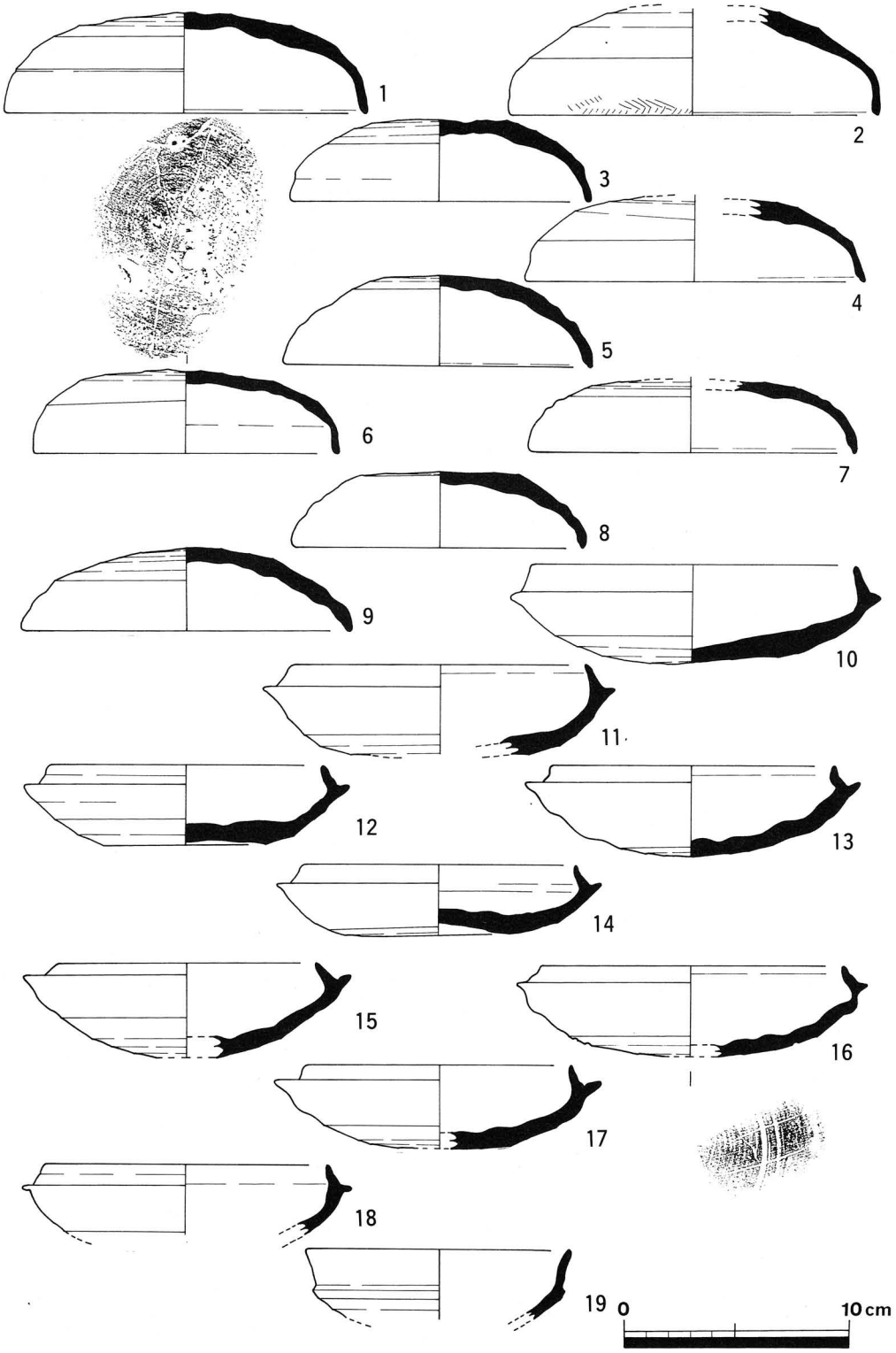
第２次焼成床面上およびその被覆土中から検出された遺物は、須恵器の杯蓋17点・杯身13点・高杯蓋２点・高杯１点である。

杯蓋の口縁部内面にあまい段を成するものが３点あり、杯身の底部内面中央に同心円文を残すものがみられるなど、第１次焼成床面と同様にやや古い特色を有する須恵器が存在する。と同時に、底部ヘラ切り未調整の杯身や、いわゆる乳首形のつまみを付して口縁部にかえりを有する杯蓋なども存在するため、この床面資料が有する型式幅は広いように思われる。

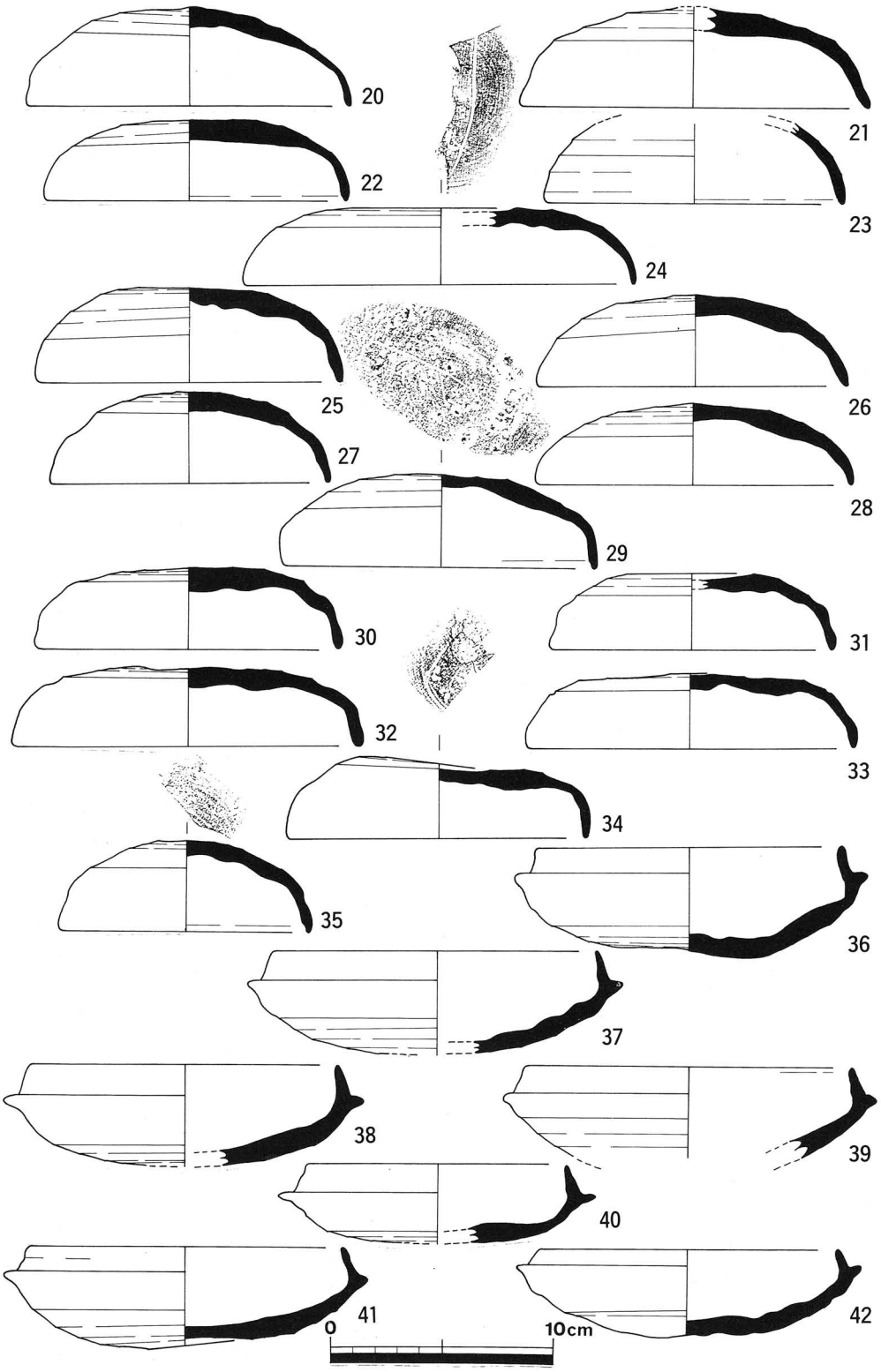
総数33点のうち、残存が１／２未満の個体は17点であり、床面における遺物の遺存率は第１次焼成床面よりも高いようである。

③第３次焼成床面出土遺物［ＩＫ１－３］（第16図、図版10・11－15～26、第４表）

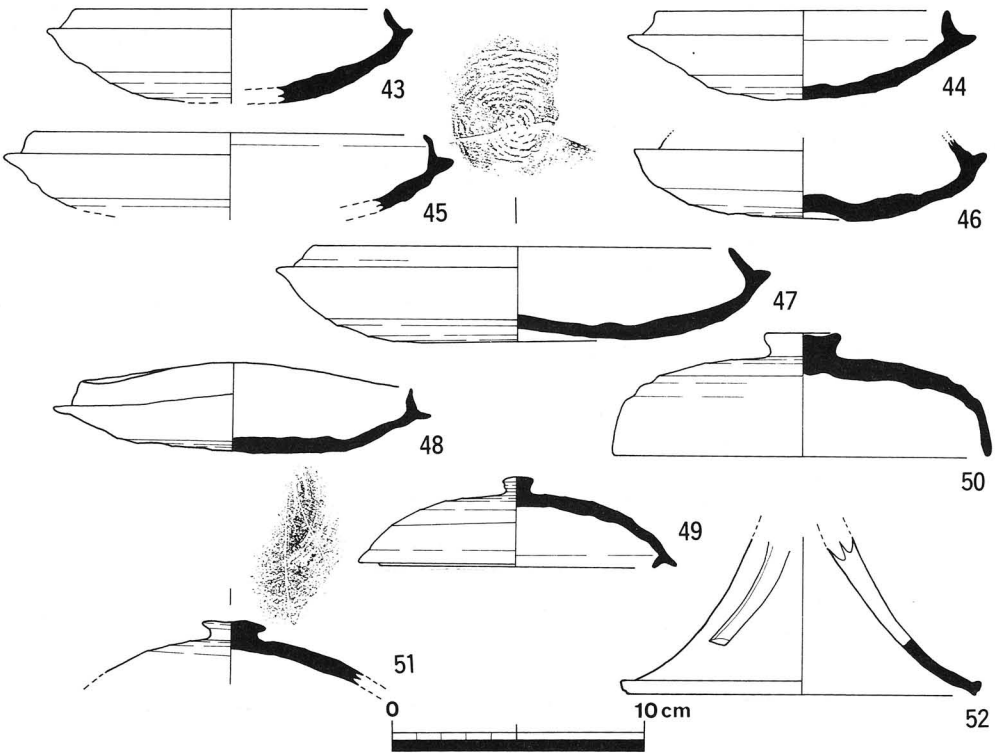
第３次焼成床面上から検出した遺物は、杯蓋４点・杯身17点・高杯蓋１点である。杯身64・杯身65・杯身66は底部がヘラ切り未調整であり、杯蓋・杯身ともに口径の縮小化が総体としてみられることから、第２次焼成床面資料との型式差の存在が感じられる。



第13図　今熊１号窯第１次焼成床面出土遺物［ＩＫ１－１］



第14図　今熊１号窯第２次焼成床面出土遺物(1)［ＩＫ１－２］



第15図　今熊１号窯第２次焼成床面出土遺物(2)［ＩＫ１－２］

また、その型式幅もきわめて限定しうるものといえよう。

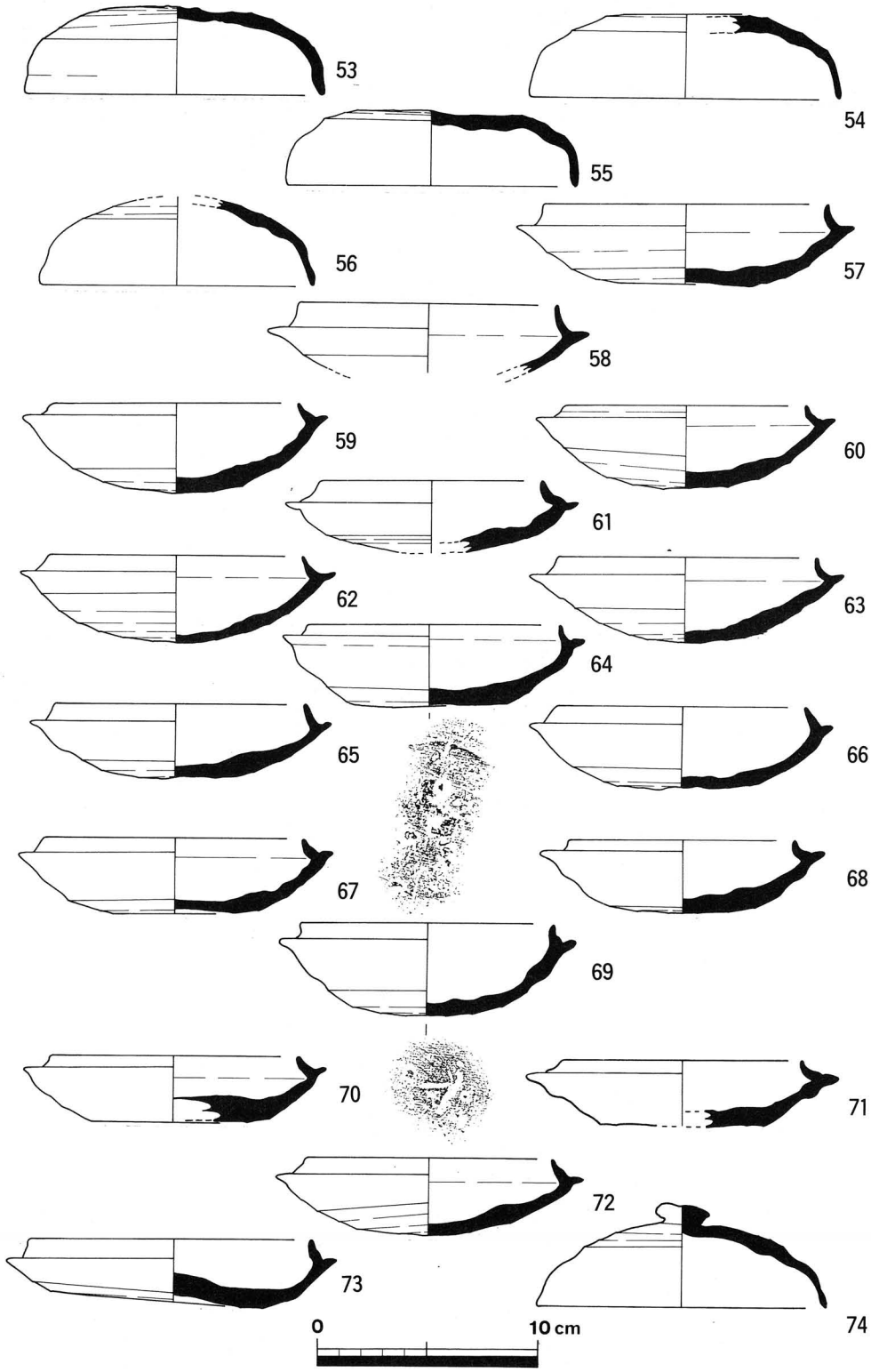
総数22点のうち、残存が１／２未満の個体は６点であり、ほぼ完形に近いものもしくはほぼ完形のものは15点を数える。よって、床面における遺物の遺存率は先の２枚の焼成床面に較べて著しく高く、遺物出土状況にも顕れているように、最終焼成ののちに取り残されたまま放棄もしくは天井の崩壊等により、この床面が結果としてそのまま保存された可能性が強い。すなわち、第３次焼成床面の資料は、単一回の焼成に伴う一括資料として扱うことができうる、型式編年において有為性の高い窯体資料である。

④焼成部攪乱坑内出土遺物（第17図、図版11－28～30、第５表）

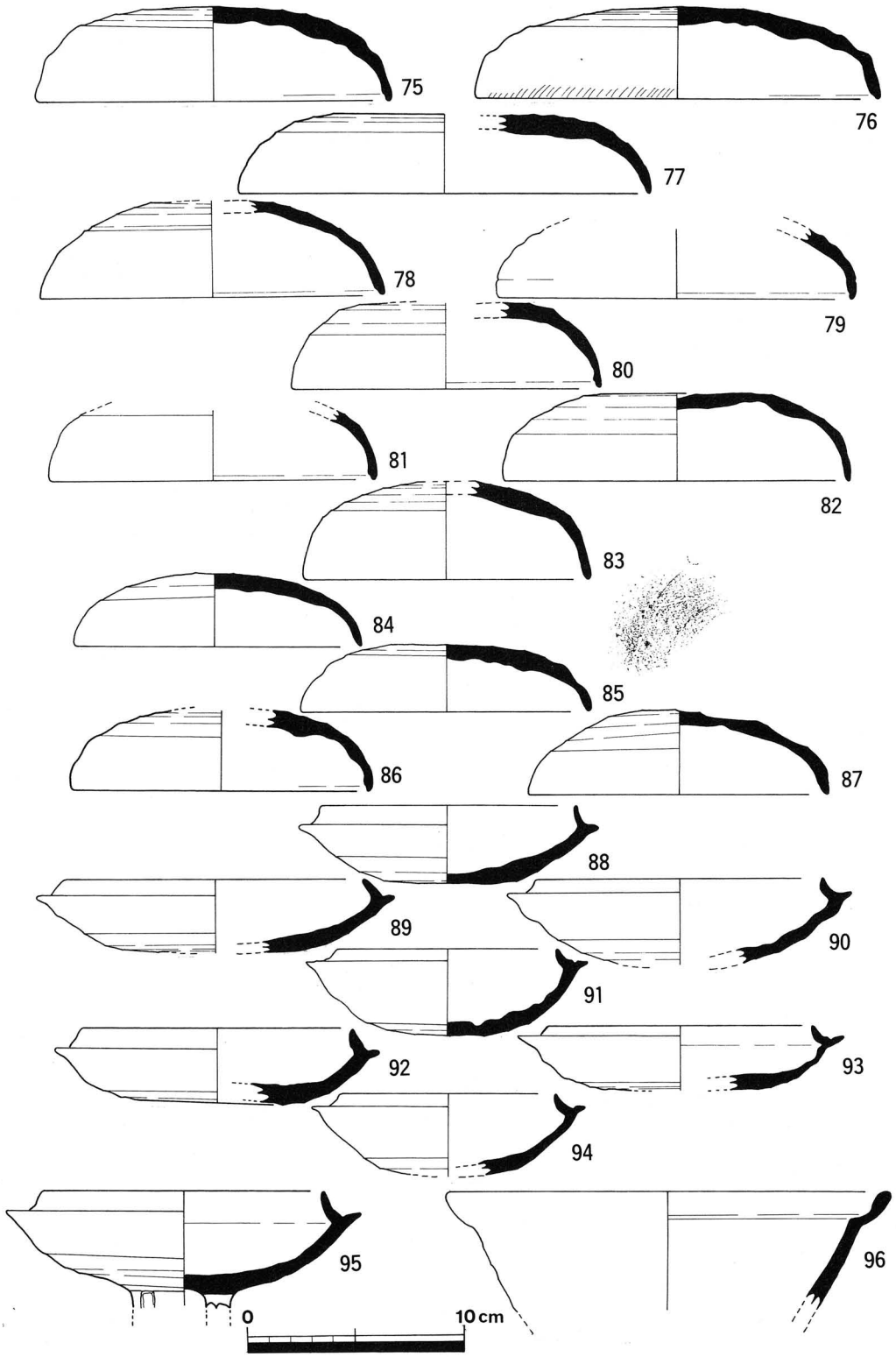
焼成床面および右側壁を奥側において破壊する攪乱坑内からも、コンテナ約１箱分の遺物が出土した。この攪乱坑のほぼ１層の埋土である暗黄褐色砂質土層中から出土した遺物のうちで図化しえたものは、須恵器の杯蓋13点・杯身７点・有蓋高杯１点、陶器鉢１点の計22点である。

杯蓋75・76・78・79・80・81・86の口縁部内面にはあまい段が形成されており、杯身76の口縁部外面にはハケ状工具による調整が左下がりのナナメ方向に施されている。

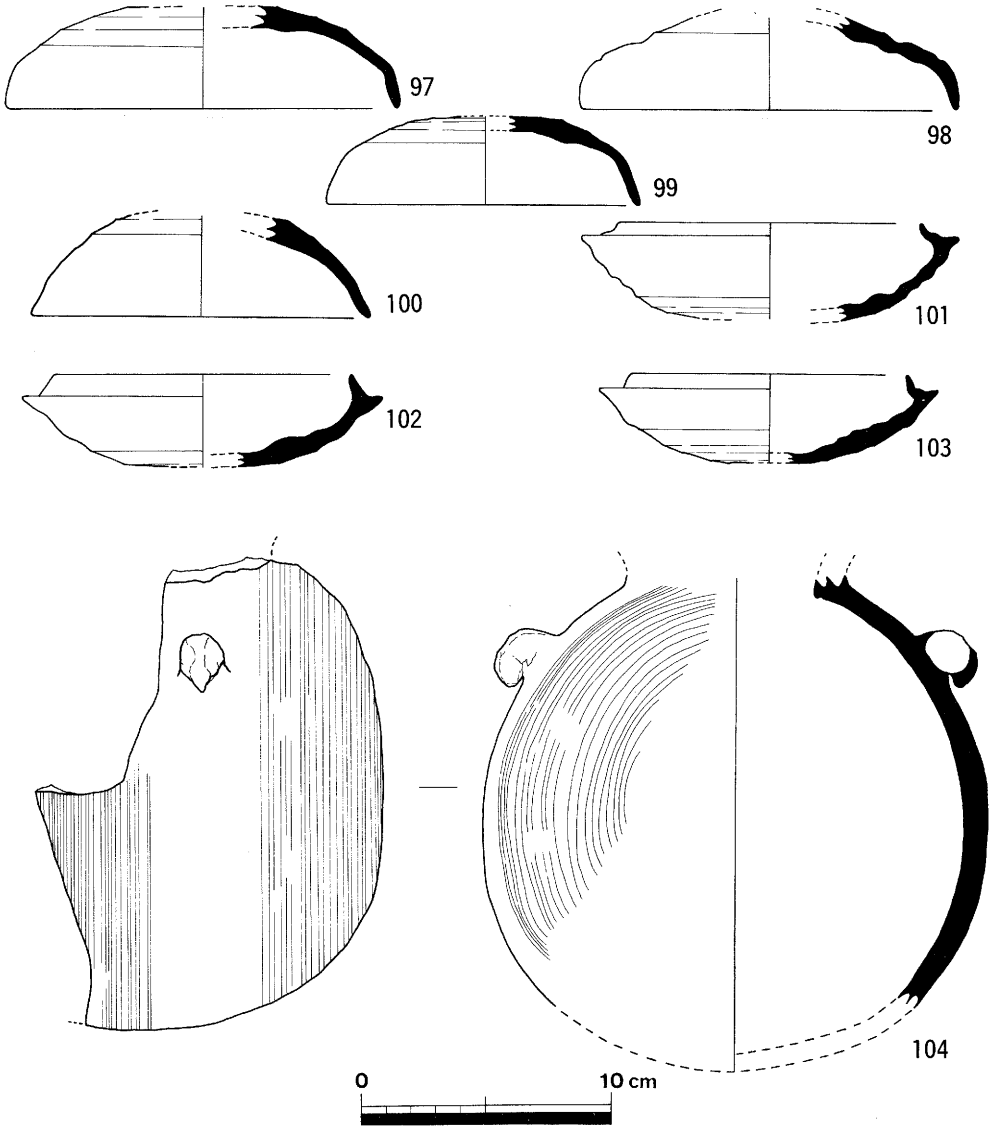
陶器の鉢と思われる96は口縁部付近のみを残存する。全体に乳白色の釉を施し、口縁部



第16図　今熊１号窯第３次焼成床出土遺物［ＩＫ１－３］



第17図　今熊１号窯焼成部攪乱坑内出土遺物



第18図　今熊１号窯焼成部流入土内出土遺物

体部境界の内面に段を成して受部とし、この部分は無釉であることから、有蓋の鉢であると考えられる。この鉢は瀬戸美濃系の陶器と推定され、近世以降の時期が与えられるようである。この撹乱坑の掘削時期を示すであろう唯一の資料である。

⑤焼成部流入土内出土遺物（第18図、第６表）

焼成部の流入土内、土層番号８・９の層内に包含されていた遺物はごく少数量であったが、須恵器杯蓋４点・杯身３点・提瓶１点を図化しえた。

(5)考察　―焼成床面ごとの杯身のたちあがりと法量の比較―

本窯では、一部分ながらも焼成部の調査を実施し、床面上に遺棄された須恵器を焼成床面ごとに検出することができた。

第１次焼成床面から第３次焼成床面までの各床面において検出した須恵器を概観すると、第１次焼成床面および第２次焼成床面のものは、杯蓋の口縁部内面に段を成すものを含むように若干古い要素を有するものの、ＴＫ43型式もしくはＴＫ209型式の範疇におさまる感があり、第３次焼成床面の須恵器は、蓋杯の口径が第１次焼成床面・第２次焼成床面のそれに比して小さいものとなり、ＴＫ209型式およびＴＫ217型式に比定しうる感がある。

これを具体的に把握しなおすために、この項では焼成床面ごとに杯身の形態およびその法量の幅を確認して比較を行なう。

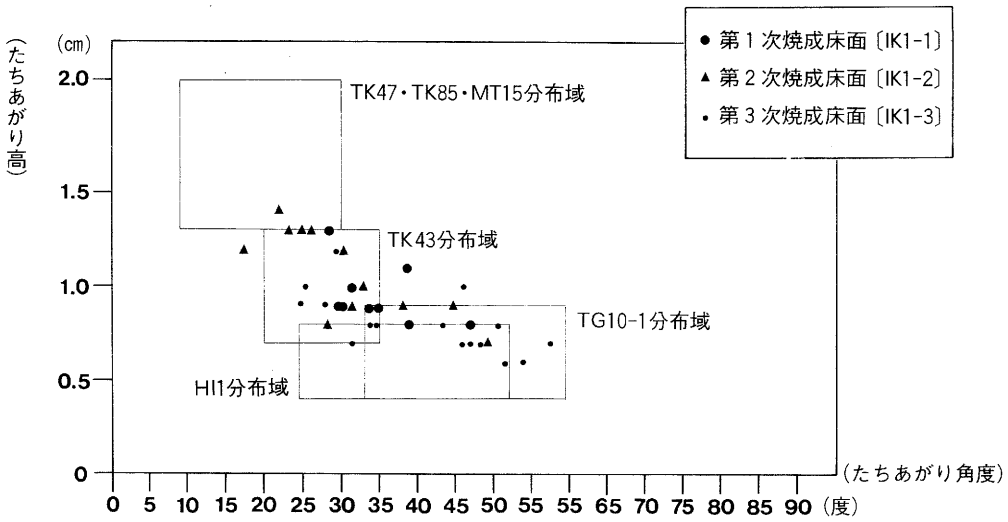
杯身の形態比較はたちあがりの角度と高さを比較要素とした[3)]。たちあがり高は、たちあがり基部外面から口縁端部までの鉛直方向の距離を計測し、図中の縦軸とした。たちあがり角度は、たちあがり基部外面を中心点として鉛直方向を０°とし、これからたちあがり基部外面と口縁端部を結んだ直線までの角度を計測した。これを図中では横軸とした。なお、個体中においてたちあがり高、もしくはたちあがり角度にバラツキがある場合はその平均値を採った。

第１次焼成床面資料（以降はＩＫ１－１と略記する）と第２次焼成床面資料（同じくＩＫ１－２）と第３次焼成床面資料（同じくＩＫ１－３）の法量分布は第20図のとおりである。今回の調査で検出した全資料のうち、ここでは口径と器高を完全に計測しうるもののみを対象とした。結果、全資料点数39点のうち26点を図中にドットすることができた。

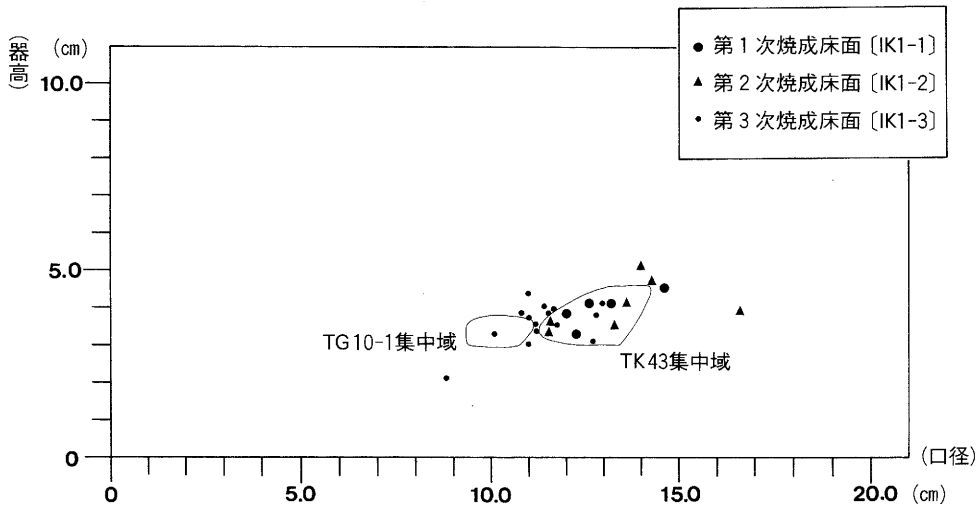
図中にある口径11.3cm～14.2cm・器高 3.0cm～ 4.6cmの範囲内にある偏楕円形のライン内はＴＫ43号窯出土資料の集中域を表わす。また同様に口径 9.4cm～11.1cm・器高 3.0cm～ 3.6cmの範囲内にある偏楕円形のライン内はＴＫ 217型式前半の資料であるＴＧ10―１号窯出土資料の集中域を表わす。

ＩＫ１―１の法量の計測値は、杯身10の１点以外はすべてＴＫ43集中域内におさまるものである。杯身10の数値も口径がわずかに上回るのみで集中域に近い値である。

ＩＫ１―２の法量の計測値は、４点がＴＫ43型式集中域内にあり、３点がその域外にある。底部内面に同心円文がある杯身47は口径が16.6cmで、集中域より大きく離れている。杯身41は口径が14.3cm、器高が 4.7cmで、両方の値がそれぞれ集中域よりもわずか 0.1cm上回るだけでるため、集中域内に含まれる資料と考えて大過ないと理解される。杯身36は器高が 5.1cmを測るため、集中域を逸脱している。ＴＫ10型式に比定されている各遺跡の他の資料が、口径が11.0cm～15.0cm程度で、器高が 5.0cm前後を上回る値を示すようであるので、杯身36はＴＫ10型式として認めうる法量を有しているといえよう。



第19図　杯身のたちあがり高とその角度



第20図　杯　身　の　法　量

ＩＫ１―３の法量の計測値は、６点がＴＫ43集中域内にあり、３点がＴＧ10―１集中域内にあり、５点がその境界域にある。この分布状況は、ほぼＴＫ 209型式の範疇で捕まえた狭山池２号窯灰原資料（以下ＳＩ２と略記）の分布状況[4)]に相似している。

ＩＫ１―１・ＩＫ１―２・ＩＫ１―３のたちあがりの分布は、第19図のとおりである。ＩＫ１―１のたちあがりは、高さが 0.8cm～ 1.3cmの範囲内に、角度が28°30’～47°00’の範囲内に分布する。すなわち、ＴＫ43分布域からＴＧ10－１分布域にかけて分布し同様の分布を示す資料としてＳＩ２が挙げられる。法量においてＴＫ43集中域をわずかに上回る杯身10のたちあがりは、高さが 1.3cm、角度が28°30’であり、ＴＫ10型式の杯身の数値と比肩しうるものである。

ＩＫ１―２のたちあがりは、高さが 0.7cm～ 1.4cmの範囲内に、角度が17°30’～48°45’の範囲内に分布する。すなわち、ＭＴ15分布域からＴＫ43分布域、さらにＴＧ10－１分布域にかけての分布を示すこととなる。ＴＫ10型式として認めうる法量を有する杯身36は、たちあがり高が 1.2cm、たちあがり角度が17°30’を計測し、ＭＴ15分布域とＴＫ43分布域の境界付近において両者を隔てる主要因であるたちあがり高が低いために、ＴＫ10型式のたちあがりとしては不足である。ところが、底部中央を欠損するために法量分布図にドットしえなかった杯身38は、口径14.0cm・残存高 4.6cmのＴＫ10型式の杯身として遜色ない法量をもつと同時に、たちあがり高 1.4cm・たちあがり角度22°00’のＭＴ15分布域におさまるたちあがりをもっている。

ＩＫ１―３のたちあがりは、高さが 0.6cm～ 1.2cm、角度が24°45’～57°30’の範囲内に分布する。すなわち、ＴＫ43分布域からＴＧ10－１分布域・ＨＩ１（東池尻１号窯資料）分布域にかけての分布を示している。全体的に、角度の点ではＳＩ２の分布域よりも広く、高さの点ではＨＩ１の分布よりも高めの分布と理解しうる。

以上のたちあがりおよび法量の比較の結果、次のように結論づけたい。

ＩＫ１―１は全体的な傾向として、法量はＴＫ43型式に比定しうるもので、たちあがりの形態はＴＫ 209型式の範疇に含まれると考えられるＳＩ２と同様の分布を示す。しかし少数ながら、ＴＫ10型式的な法量とたちあがりをもつ杯身を含んでいる。

ＩＫ１―２は、法量はＴＫ43型式に比定しうるものとＴＫ10型式に含むべきものが存在する。たちあがりの形態はＴＫ43型式を中心としてＴＫ 209型式に含まれるものを含む。と同時に、ＴＫ10型式のたちあがりと法量を備えた杯身も存在する。

ＩＫ１―３は、法量はＳＩ２と相似した分布を示す。たちあがりの形態も高さを重視すれば、ＳＩ２と似通った分布を示すと理解される。

ＩＫ１―１は、第１次焼成床面で行われたであろう複数回の焼成にともなう須恵器を含んでいる可能性が高い。ＩＫ１―１のたちあがりがＳＩ２と同様の分布を示すとはいえど

も、ＳＩ２のような法量の縮小化はみられない。よって、このことを重視して、第１次焼成床面における最終焼成はＴＫ43型式の須恵器を焼成した段階と考えたい。

ＩＫ１―２も複数回の焼成にともなう須恵器を含んでいる可能性を考えておかねばならないが、法量がＳＩ２にみられるような縮小化したものを含んでいないので、第２次焼成床面における焼成時にはＴＫ43型式の須恵器を産出したと捉えておきたい。ところで、ＩＫ１―２にはＴＫ10型式のたちあがりと法量をもつ杯身が存在する。この須恵器は、あきらかに第１次焼成よりも後に焼成されたものであるので、ＴＫ43型式の須恵器を生産したのちにあらたに床面を貼り、あらためてＴＫ10型式的な杯身をわずかといえども生産したことになる。

ＩＫ１―３は、第３次焼成床面で複数回の焼成を行なっていようとも、単一回の焼成にともなう資料である可能性が高い。法量がＳＩ２のような縮小化傾向をみせ、たちあがりの形態もＳＩ２と同様の分布を示すことから、本窯の最終焼成時にはＴＫ 209型式の須恵器を産出したといえよう。

(6)まとめ

今回の調査では、窯体が完全に破壊される寸前で何とか記録保存を行うことができた。また、焼成床面の分層が比較的容易に行いえたために、短い調査期間とはいえ、焼成床面ごとに須恵器を検出することができえたのは、不幸中の幸いといえよう。今回の調査で確認しえたのは、窯体のごく一部分に過ぎず、なお調査区の北側には焼成部と煙道が、調査区の南側には焼成部と燃焼部と焚口が、さらにその先には灰原が遺存しているであろう。宅地の造成にともなって盛土がなされ、旧地形が把握しにくくなっているので、今後もこの付近における開発工事には充分な注意をはらう必要がある。この報告をまとめるに際して外山秀一氏、木許守氏、梅本康広氏から貴重な御指導と御助言を賜った。文末ながら記して深謝致します。

註記

1）大阪狭山市教育委員会『大阪狭山市埋蔵文化財分布図』1992年

2）同様のハケ目調整のある杯蓋は、池尻新池南窯灰原出土資料に１点確認される。

3）この形態比較は、以前行なった下記の考察で用いたのと同じ方法で実施した。
植田隆司「池尻遺跡南窯出土須恵器の基準資料との比較」「池尻新池南窯発掘調査報告書―陶邑窯跡群の調査―」『大阪狭山市文化財報告書』７、1992年
同「狭山池２号窯・狭山池３号窯・東池尻１号窯・狭山池北堤窯出土須恵器の基準資料との形態・法量比較」「狭山池２号窯・３号窯出土遺物整理報告」『狭山池調査事務所平成４年度調査報告書』1993年

4）前出註３文献

—第2表— 今熊1号窯第1次焼成床面出土遺物観察表

器種	図面 図版	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯蓋	13－1 9－1	口径 16.2 器高 4.6	体部・口縁部は下外方に下る。口縁部内面にあまい段を成し、端部は丸くおさめる。 天井部はやや低くやや丸い。 天井部・体部境界外面に鈍い凹線をめぐらす。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面5／7、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：暗灰赤色。胎土：密。2㎜以下の長石を若干含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：1／4。一部反転復元。 口縁部・体部外面に自然釉付着。
同上	13－2	口径 16.6 残存高 4.8	体部・口縁部はほぼ垂直に下る。口縁部内面に非常にあまい段を成し、端部は丸くおさめる。 天井部はやや高い。天井部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面7／8、回転ヘラ削り調整。 口縁部外面、ハケ目調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内－浅橙色、外－灰色。 胎土：密。2㎜以下の長石をわずかに含む。焼成：不良。 残存：1／16。反転復元。
同上	13－3	口径 13.4 器高 3.7	体部・口縁部は下外方に下る。 口縁端部は丸くおさめる 天井部はやや低く平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面2／5、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：暗灰色。胎土：密。2㎜以下の長石をわずかに含む。焼成：良好。 残存：1／4。合成復元。 内面一部灰かぶり。
同上	13－4	口径 15.4 器高 3.7	体部・口縁部は下外方に下る。口縁部内面に非常にあまい段を成すが全周しない。 口縁端部は丸くおさめる。 天井部は低い。天井部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ削り調整 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：内－暗灰紫色、外－暗灰色。胎土：密。1㎜以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1／3。合成復元。
同上	13－5	口径 14.0 器高 4.1	体部・口縁部はやや内彎して下外方に下る。 口縁部内面にあまい段を成し、口縁端部は丸くおさめる。 天井部はやや低くやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面3／5、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：暗灰色。 胎土：密。2㎜以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1／2。
同上	13－6 9－2	口径 13.6 器高 3.8	体部は垂直に下り、口縁部でやや外反する。 口縁端部は丸くおさめる。 天井部は低く平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面8／9、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：暗灰色。 胎土：密：3㎜以下の長石を若干含む。3mm以下の石英を若干含む。 焼成：良好。残存：ほぼ完形。 ヘラ記号：天井部外面に「一」あり。 外面一部灰かぶり。天井部外面に土器片・窯壁片付着。内外面に自然釉付着。内面灰かぶり。
同上	13－7	口径 12.8 残存高 3.2	体部・口縁部はやや内彎して下外方に下る。 口縁部内面に段を成し、端部は丸くおさめる。 天井部は低く平らに近い。天井部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面5／6、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：暗灰紫色。胎土：密。2㎜の長石を若干含む。焼成：良好。 残存：1／4。反転復元。
同上	13－8	口径 13.4 器高 3.5	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。 口縁部内面に非常にあまい段を成し、口縁端部は丸くおさめる。 天井部は低く平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面1／2、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：暗灰青色。胎土：密。2㎜以下の長石を含む。チャートを含む。焼成：良好、堅緻。残存：1／4。反転復元。
同上	13－9	口径 15.0 器高 3.8	体部は外下方に下り、口縁部は下外方に下る。 口縁端部は丸くおさめる。 天井部は低く平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面9／10、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：暗灰青色。胎土：密。2㎜以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1／3 反転復元。内面一部に自然釉付着。

器種	図面 図版	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯 身	13－10 9－3	口径 14.6 受部径 16.6 器高 4.5 たちあがり高 1.3 たちあがり角度 28° 30'	たちあがりは内傾してのび端部は丸くおさめる。 受部は水平に短くのび、端部は丸くおさめる。 底体部はやや浅く、底部は平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面7／8、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内－暗灰紫色、外－暗灰色。 胎土：密。3㎜以下の長石を若干含む。焼成：良好。 残存：1／2。合成復元。 一部自然釉付着。
同 上	13－11	口径 13.2 受部径 16.0 器高 4.1 たちあがり高 1.1 たちあがり角度 38° 30'	たちあがりは内傾したのち、端部で上内方に内傾し、端部はやや丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部はやや浅い。底部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面6／7、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内－暗灰紫色、外－暗灰色。 胎土：密。2㎜以下の長石を若干含む。焼成：良好。 残存：1／8。反転復元。
同 上	13－12 9－4	口径 12.4 受部径 14.8 残存高 3.7 たちあがり高 0.9 たちあがり角度 33° 30'	たちあがりは内傾したのち中位で上内方にのび端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部は平ら。底部中央外面欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面9／10、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：暗灰色。胎土：密。2㎜以下の長石を若干含む。焼成：良好。 残存：ほぼ完形。一部合成復元。 底部外面が焼成床面と熔着。内面に自然釉付着。
同 上	13－13 9－5	口径 12.6 受部径 15.0 器高 4.1 たちあがり高 0.9 たちあがり角度 30° 15'	たちあがりは内傾したのち中位で直立し、端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面1／2、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：暗紫灰色。 胎土：密。3㎜以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：3／4。 内外面一部灰かぶり。受部上面に自然釉付着。底体部外面に土器片付着。
同 上	13－14 9－6	口径 12.3 受部径 14.7 器高 3.3 たちあがり高 0.9 たちあがり角度 30° 15'	たちあがりは内傾したのち中位で上内方にのび端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部はやや鋭い。 たちあがり基部内面でややあまい段を成す。 底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面4／5、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内－暗灰色、外－暗灰青色。 胎土：密。3㎜以下の長石を若干含む。2㎜以下の石英をわずかに含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：4／5。合成復元。体部外面に土器片付着。内外面一部灰かぶり。
同 上	13－15	口径 11.6 受部径 14.4 残存高 4.3 たちあがり高 0.8 たちあがり角度 47° 00'	たちあがりは内傾してのび端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、上面で凸面を成し、端部は丸くおさめる。 底体部はやや浅く、底部は丸い。 底部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面8／9、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：暗灰色。 胎土：密。チャートを含む。 焼成：良好。 残存：1／4。反転復元。 底体部外面・受部上面に自然釉付着。

＊たちあがり角度は、たちあがり基部外面を中心に鉛直方向を0°としてたちあがり基部外面と口縁端部を結んだ直線までの角度を計測したもの。

器種	図面図版	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯身	13−16	口径 13.4 受部径 15.8 残存高 4.1 たちあがり高 0.8 たちあがり角度 39°00'	たちあがりは内傾したのち中位で上内方にのび端部は丸くおさめる。 受部はやや外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部は平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面4／5、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内−暗灰色、外−暗灰青色。 胎土：密。2㎜以下の長石を若干含む。 焼成：良好。 残存：1／3。反転復元。 ヘラ記号：底体部外面にあり。
同上	13−17	口径 12.0 受部径 14.8 器高 3.8 たちあがり高 1.0 たちあがり角度 31°15'	たちあがりは内傾したのち低位で上内方にのび端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、上面基部でやや凸面を成し、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部はほぼ平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面5／6、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：暗灰青色。 胎土：密。長径8㎜の長石を1以上含む。2㎜以下の長石を若干含む。 焼成：良好。残存：1／4。反転復元。内面・たちあがり基部外面に自然釉付着。
同上	13−18	口径 12.8 受部径 14.9 残存高 3.2 たちあがり高 0.9 たちあがり角度 29°45'	たちあがりは内傾したのち中位で上内方にのび端部は丸くおさめる。 受部はやや外下方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅い。 底部下半以下欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰色。 胎土：密。2㎜以下の長石を若干含む。チャートを含む。 焼成：良好。 残存：1／24。反転復元。
高杯杯部	13−19	口径 12.0 残存高 3.2	体部は上外方にのび、口縁部はやや外反して上外方にのびる。口縁端部は丸くおさめる。 底体部はやや浅い。底部下半以下欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：暗灰色。 胎土：密。1㎜以下の長石をわずかに含む。 焼成：良好。 残存：杯部の1／10。反転復元。 内外面に自然釉付着。

—第3表— 今熊1号窯第2次焼成床面出土遺物観察表

器種	図面図版	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯蓋	14−20	口径 14.6 器高 4.5	体部・口縁部は下外方に下る。 口縁端部は丸くおさめる。 天井部はやや高く丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面2／3、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内−暗灰色、外−暗灰青色。 胎土：密。2㎜以下の長石を含む。 焼成：良好。残存：1／2。合成復元。外面に自然釉付着。
同上	14−21	口径 15.6 残存高 4.6	体部・口縁部は下外方に下る。 口縁端部は丸くおさめる。 天井部は低くやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面5／6、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内−淡灰色、外−淡灰黄色。 胎土：密。2㎜以下の長石を若干含む。焼成：やや不良。残存：1／4。反転復元。外面に自然釉付着。
同上	14−22	口径 13.6 器高 3.7	口縁部・体部は内彎して下外方に下る。 口縁部内面にあまい段を成し、口縁端部は丸くおさめる。 天井部は低く平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面5／6、回転ヘラ削り調整。 天井部内面中央静止ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：暗灰色胎土：密。2㎜以下の長石を若干含む。 焼成：良好。 残存：3／5。一部反転復元。

器種	図面図版	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯蓋	14－23	口径 13.4 残存高 3.7	体部・口縁部は下外方に下る。口縁部内面に非常にあまい段を成し、口縁端部は丸くおさめる。 天井部はやや低い。天井部上半欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内－暗灰色、外－暗灰青色。 胎土：密。2㎜以下の長石をわずかに含む。焼成：良好。 残存：1／16。反転復元。
同上	14－24	口径 17.8 器高 3.5	体部は下外方に下り、口縁部はやや下方に下る。 口縁端部は丸くおさめる。 天井部は低く平ら。天井部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面5／6、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内－灰色、外－暗灰青色。 胎土：密。1㎜以下の長石を若干含む。チャートを含む。焼成：良好。 残存：1／4。反転復元。 ヘラ記号：天井部外面にあり。
同上	14－25 9－7	口径 14.0 器高 4.3	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。 天井部はやや低く平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：暗灰紫色。胎土：密。4㎜以下の長石を含む。焼成：良好。 焼成：良好。残存：完形。 天井部外面に窯壁片付着
同上	14－26	口径 13.9 器高 4.2	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。 天井部はやや低くやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：暗灰紫色。胎土：密。2㎜以下の長石を若干含む。チャートを含む。焼成：良好。 残存：3／4。一部反転復元。外面に焼成床面の破片が付着。外面一部灰かぶり。内外面に自然釉が付着。
同上	14－27	口径 12.6 器高 4.2	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。 天井部は低く丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面2／3、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：灰色。 胎土：密。2㎜以下の長石をやや多く含む。チャートを含む。 焼成：良好。残存：1／3。一部反転復元。内外面一部灰かぶり。天井部外面に土器片付着。
同上	14－28	口径 14.4 器高 3.7	体部は外下方に下り、口縁部は下外方に下る。 口縁端部は丸くおさめる。 天井部は低く平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ削り調整 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：暗灰色。胎土：密。2㎜以下の長石を若干含む。焼成：良好。 残存：1／2。内外面一部に自然釉付着。
同上	14－29 9－8	口径 14.0 器高 4.3	体部・口縁部は下方に下り、口縁部内面に非常にあまい段を成すが全周しない。 口縁端部は丸くおさめる。 天井部はやや低く平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面5／6、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：暗灰色。 胎土：密。1㎜の長石を若干含む。 焼成：良好。残存：完形。 ヘラ記号：天井部外面に「—」あり。 天井部外面に粘土塊付着。内外面に自然釉付着。
同上	14－30	口径 14.0 器高 3.7	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。 天井部は低く平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面2／3、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：暗灰色。 胎土：密。2㎜以下の長石を含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：1／2。一部合成復元。天井部内面に粘土塊付着。

器種	図面 図版	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯 蓋	14－31	口径　13.0 器高　3.5	体部は下外方に下り、口縁部はやや外反して下外方に下る。口縁端部は丸くおさめる。 天井部は低く平ら。天井部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面5／6、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰青色。胎土：密。1㎜の長石を若干含む。焼成：良好。 残存：1／4。反転復元。
同 上	14－32	口径　16.0 器高　3.5	体部・口縁部は下外方に下り、口縁部内面にあまい段を成すが全周しない。 口縁端部は丸くおさめる。 天井部は低く平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面3／4、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：灰青色。 胎土：密。3㎜以下の長石を含む。 チャートを含む。焼成：良好。 残存：1／5。反転復元。
同 上	14－33	口径　14.6 器高　3.5	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。 口縁端部は丸くおさめる。 天井部は低くほぼ平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面5／6、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内－灰色、外－暗灰色。胎土：密。2㎜以下の長石を若干含む。 焼成：良好。残存：1／3。反転復元。天井部内面に粘土塊付着。
同 上	14－34	口径　13.4 器高　3.8	体部はやや下外方に下り、口縁部は垂直に下る。 口縁端部は丸くおさめる。 天井部は低く平ら。天井部外面一部欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面2／3、回転ヘラ削り調整。 天井部・体部境界外面の一部、放射状の静止ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内－暗灰色、外－灰青色。 胎土：密。2㎜以下の長石を含む。 焼成：良好。 残存：6／7。 体部・口縁部外面に自然釉付着。
同 上	14－35	口径　11.6 残存高　4.1	体部・口縁部は下外方に下り、口縁部内面にやあまい段を成す。口縁端部は丸くおさめる。 天井部はやや低くやや丸い。 天井部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面3／4、回転ヘラ削り調整。 天井部内面中央、静止ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰色。胎土：密。4㎜以下の長石を含む。 焼成：良好。 残存：1／3。反転復元。
杯 身	14－36 9－9	口径　14.0 受部径　16.0 器高　5.1 たちあがり高　1.2 たちあがり角度　17°30'	たちあがりは内傾したのち中位でやや上方にのび、端部は丸くおさめる。 受部は外上方に短くのび、端部は丸くおさめる。 底体部はやや深く、底部はほぼ平ら。 全体にやや焼け歪む。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面7／8、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。底部外面中央に回転の中心が2箇所ある。 色調：暗灰色。 胎土：密。3㎜以下の長石をやや多く含む。チャートを含む。 焼成：良好。 残存：2／3。
同 上	14－37	口径　14.8 受部径　17.0 残存高　4.7 たちあがり高　1.3 たちあがり角度　24°45'	たちあがりは内傾したのち端部でやや上内方にのび、端部は丸くおさめる。 受部はほぼ水平に短くのび端部は丸くおさめる。 底体部はやや浅く、底部はやや丸い。 底部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内－灰色、外－暗灰色。 胎土：密。2㎜以下の長石を含む。 チャートを含む。焼成：良好。 焼成：良好。 残存：1／5。反転復元。
同 上	14－38	口径　14.0 受部径　16.4 残存高　4.6 たちあがり高　1.4 たちあがり角度　22°00'	たちあがりはやや内彎して上内方にのび、端部はやや丸くおさめる。 受部は水平にのび、端部は丸くおさめる。 底体部はやや浅く、底部は平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面7／8、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内－暗灰褐色、外－淡灰緑色。 胎土：密。1㎜の長石を若干含む。 焼成：やや良。 残存：1／5。反転復元。 受部上面に自然釉付着。

器種	図面図版	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯身	14−39	口径 14.8 受部径 16.8 残存高 4.2 たちあがり高 1.3 たちあがり角度 23° 00'	たちあがりは内傾してのび端部は丸くおさめる。 受部は水平に短くのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅い。底部下半以下欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：暗灰色。 胎土：密。1㎜の長石をわずかに含む。焼成：良好。 残存：1／8。反転復元。
同上	14−40	口径 11.6 受部径 14.4 残存高 3.6 たちあがり高 1.3 たちあがり角度 25° 45'	たちあがりは内傾してのび、端部はやや丸くおさめる。 受部は水平にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部は平ら。 底部中央欠損。 底体部外面剥離。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面5／6、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰紫色。 胎土：密。1㎜の長石を若干含む。 焼成：良好。 残存：1／5。反転復元。
同上	14−41 9−10	口径 14.3 受部径 16.6 器高 4.7 たちあがり高 1.2 たちあがり角度 30° 00'	たちあがりは内傾したのち中位でやや上内方にのび、端部は丸くおさめる。 受部はほぼ水平に短くのび端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部は平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内−暗灰色、外−灰色・暗灰紫色。胎土：密。2㎜以下の長石を含む。チャートを含む。 焼成：良好。 残存：9／10。
同上	14−42 10−11	口径 13.6 受部径 15.6 器高 4.1 たちあがり高 0.8 たちあがり角度 28° 15'	たちあがりは内傾してのび、端部でやや上内方にのびる。口縁端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面1／9、回転ヘラ削り調整。底部外面7／9（底部中央）、ヘラ切り未調整。 底部内面中央、静止ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰青色。 胎土：密。2㎜以下の長石を若干含む。焼成：良好。 残存：ほぼ完形。
同上	15−43	口径 12.4 受部径 14.6 残存高 3.8 たちあがり高 0.9 たちあがり角度 38° 00'	たちあがりは内傾したのち中位で上内方にのび端部はやや鋭い。 受部は外上方にのび、端部はやや丸くおさめる。 底体部は浅く、底部は平らに近い。 底部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面4／5、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰色。 胎土：密。3㎜以下の長石を若干含む。焼成：良好。 残存：1／5。反転復元。 底体部外面灰かぶり。
同上	15−44	口径 11.6 受部径 14.0 器高 3.6 たちあがり高 1.0 たちあがり角度 32° 45'	たちあがりは内傾したのち端部付近で直立する。 口縁端部は丸くおさめる。 受部はやや外上方にのび、端部は丸くおさめる。 たちあがり基部内面で非常にあまい段を成す。 底体部は浅く、底部はほぼ平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面4／5、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰色。 胎土：密。1㎜の長石を若干含む。 焼成：良好。 残存：1／2。反転復元。 底体部外面に自然釉付着。

器種	図面図版	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯身	15−45	口径 15.6 受部径 18.0 残存高 3.1 たちあがり高 0.9 たちあがり角度 30° 30'	たちあがりは上方にのびたのち端部付近で上内方にのびる。口縁端部はやや丸くおさめる。 受部は水平にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅い。底部下半以下欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰色。 胎土：密。2㎜以下の長石を若干含む。焼成：良好。 残存：1／8。反転復元。
同上	15−46	口径 11.5 受部径 14.2 器高 3.3 たちあがり高 0.7 たちあがり角度 48° 45'	たちあがりは内傾してのびる。口縁端部を欠損する。 受部はやや上外方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部は平ら。 底部中央外面剥落。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：暗灰紫色。 胎土：密。2㎜以下の長石を若干含む。焼成：良好。 残存：3／4。底体部内面灰かぶり。 体部外面に粘土塊が付着。
同上	15−47 10−12	口径 16.6 受部径 19.6 器高 3.9 たちあがり高 0.9 たちあがり角度 44° 30'	たちあがりは内傾したのち低位で上内方にのびる。口縁端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面7／8、回転ヘラ削り調整。 底部内面中央、同心円文。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内−灰色、外−暗灰色。 胎土：密。2㎜以下の長石を含む。 焼成：良好。 残存：4／5。合成復元。
同上	15−48 10−13	口径 13.3 受部径 15.1 器高 3.5 たちあがり高 1.0 たちあがり角度 32° 45'	たちあがりは内傾したのち端部で上方にのびる。 口縁端部は丸くおさめる。 受部はやや外上方にのび、端部はやや丸くおさめる。 底体部は浅く、底部は平ら。 全体に焼け歪む。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面5／6、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰色。 胎土：密。1㎜の長石を若干含む。 焼成：良好。 残存：ほぼ完形。 底体部外面灰かぶり。底体部外面に粘土塊が付着。
杯蓋	15−49 10−14	口径 12.6 器高 3.6 つまみ径 1.3 つまみ高 0.7 かえり高 0.3 かえり角度 58° 00'	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面に内傾するかえりを付し、その端部はやや丸くおさめる。 かえりは口縁端部以下に突出し、かえり端部で接地する。 天井部はやや低くやや丸い。天井部外面中央に頂部がやや平坦な、いわゆる乳首形のつまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面6／7、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。 つまみ側面の回転ナデ調整は、やや粗く、一部に粘土の残余分が付着する。	ロクロ回転：右方向。 色調：内−灰色、外−灰青色。 胎土：密。1㎜の長石をわずかに含む。チャートを含む。 焼成：良好、堅緻。 残存：1／2。合成復元。 外面一部灰かぶり。
高杯蓋	15−50	口径 15.6 つまみ径 3.0 器高 4.9 つまみ高 1.0	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部はやや低く平らに近い。 天井部外面中央に頂部がやや凹む扁平なつまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面7／9、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：暗灰色。 胎土：密。3㎜以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1／4。反転復元。
同上	15−51	口径 —— つまみ径 2.5 残存高 2.5 つまみ高 0.8	体部・口縁部・天井部下半欠損。 天井部はやや丸い。 天井部外面中央に頂部中央がわずかに凹む扁平なつまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ削り調整 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：淡青灰色。胎土：やや粗。3㎜以下の長石を多く含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：1／6。一部合成復元。ヘラ記号：天井部外面にあり。
高杯脚部	15−52	脚底径 14.0 残存高 6.3	脚部上方1／2以上欠損。脚部は下外方に開いて下る。裾端部は外傾する凹面を成して接地する。2段3方向に長方形スカシを有すると思われる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：暗灰色。 胎土：密。2㎜以下の長石を若干含む。焼成：良好。 残存：脚部の1／9。反転復元。

＊かえり角度は、かえり基部外面を中心に鉛直方向を0°としてかえり基部外面とかえり端部を結んだ直線までの角度を計測したもの。

—第4表— 今熊1号窯第3次焼成床面出土遺物観察表

器種	図面 図版	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯 蓋	16－53 10－15	口径 13.3 器高 4.0	体部は下方に下り、口縁部はやや外反して下外方に下る。口縁端部は丸くおさめる。 天井部はやや低く平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面5／7、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：灰色。胎土：密。2㎜以下の長石を若干含む。チャートを含む。焼成：良好、堅緻。残存：5／6。外面一部に自然釉が付着。天井部外面土器片付着。
同 上	16－54	口径 13.8 残存高 3.8	体部・口縁部は下外方に下る。 口縁端部は丸くおさめる。 天井部はやや低く平ら。 天井部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面7／9、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：内－暗灰褐色、外－暗灰色。胎土：密。2㎜以下の長石を含む。焼成：良。 残存：1／6。反転復元。
同 上	16－55 10－16	口径 13.2 器高 3.4	体部・口縁部は下外方に下る。 口縁端部は丸くおさめる。 天井部は低く平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面3／4、回転ヘラ削り調整。 天井部内面中央静止ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：暗灰青色。胎土：密。3㎜以下の長石を含む。チャートを含む。焼成：良好。 残存：9／10。口縁部外面一部灰かぶり。体部外面に杯身の受部近辺の破片が付着。天井部に土器片・粘土塊が付着。
同 上	16－56	口径 12.4 残存高 3.9	体部・口縁部は下外方に下る。 口縁端部は丸くおさめる。 天井部はやや低くやや丸い。 天井部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面2／3、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰青色。胎土：密。2㎜以下の長石を含む。焼成：良好。 残存：1／5。反転復元。
杯 身	16－57 10－17	口径 12.8 受部径 15.2 器高 3.8 たちあがり高 1.0 たちあがり角度 25°15'	たちあがりは内傾したのち中位でほぼ直立し、端部はやや丸くおさめる。 受部はやや外上方にのび、端部は丸くおさめる。 たちあがり基部内面で非常にあまい段を成す。 底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面4／5、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰色。胎土：密。2㎜以下の長石を含む。チャートを含む。 焼成：良好。残存：5／6。 受部上面に杯蓋口縁部熔着。 外面灰かぶり。 底体部外面に窯壁片付着。
同 上	16－58	口径 11.6 受部径 14.6 残存高 3.0 たちあがり高 1.2 たちあがり角度 29°30'	たちあがりは内傾したのち低位で上内方にのび端部はやや鋭い。 受部は水平にのび、端部は丸くおさめる。 たちあがり基部内面で、あまい段を成す。 底体部は浅い。 底部下半欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内－灰色、外－暗灰色。 胎土：密。1㎜の長石を若干含む。 チャートを含む。焼成：良好。 残存：1／8。反転復元。 受部上面・たちあがり外面灰かぶり。
同 上	16－59 10－18	口径 13.0 受部径 13.7 器高 4.1 たちあがり高 0.7 たちあがり角度 48°15'	たちあがりは内傾したのち端部付近で上内方にのび、端部はやや丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部はやや深く、底部は丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面7／9、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：灰色。胎土：やや密。3㎜以下の長石を多く含む。1㎜の石英をわずかに含む。チャートを含む。焼成：良好。 残存：9／10。一部反転復元。内外面灰かぶり。

器種	図面 図版	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯 身	16−60 10−19	口径 10.8 受部径 13.4 器高 3.8 たちあがり高 0.7 たちあがり角度 47° 00'	たちあがりは内傾したのち中位で上方にのびる。口縁端部はやや丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。たちあがり基部内面で、あまい段を成す。底体部は浅く、底部は平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面4／5、回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：内−灰色、外−暗灰色。胎土：密。2㎜以下の長石を含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：7／8。受部上面に杯蓋口縁部熔着。底部外面窯壁片付着。受部上面灰かぶり。
同 上	16−61	口径 10.0 受部径 13.2 残存高 3.3 たちあがり高 1.0 たちあがり角度 46° 00'	たちあがりは内傾したのち中位で上内方にのび端部はやや鋭い。受部はやや外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部はやや丸い。底部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面6／7、回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：淡青灰色。胎土：密。2㎜以下の長石を若干含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：1／4。反転復元。
同 上	16−62 10−20	口径 11.4 受部径 14.1 器高 4.0 たちあがり高 0.8 たちあがり角度 50° 00'	たちあがりは内傾したのち中位で上内方にのび端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面、回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：暗灰色。胎土：密。2㎜以下の長石を多く含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：ほぼ完形。内面一部灰かぶり。
同 上	16−63 11−21	口径 11.6 受部径 14.1 器高 3.9 たちあがり高 0.8 たちあがり角度 34° 00'	たちあがりは内傾したのち端部付近でほぼ直立する。口縁端部はやや丸くおさめる。受部はやや外上方にのび、端部は丸くおさめる。たちあがり基部内面で、ややあまい段を成す。底体部は浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面、回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：灰青色。胎土：密。2㎜以下の長石を含む。チャートを含む。残存：ほぼ完形。
同 上	16−64 11−22	口径 11.5 受部径 13.7 器高 3.8 たちあがり高 0.7 たちあがり角度 31° 30'	たちあがりは内傾したのち中位で上方にのび、端部は丸くおさめる。受部はやや外上方にのび、上面でやや凸面を成し、端部は丸くおさめる。底体部はやや浅く、底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面1／3、回転ヘラ削り調整。底部外面1／2（底部中央）、ヘラ切り未調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：灰青色。胎土：粗。6㎜の長石を1含む。2㎜以下の長石を多く含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：9／10。ヘラ記号：底部外面に「一」あり。底体部外面に窯壁片付着。
同 上	16−65	口径 11.2 受部径 13.5 器高 3.4 たちあがり高 0.9 たちあがり角度 35° 45'	たちあがりは内傾してのび端部は丸くおさめる。口縁端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部ははぼ平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面1／2、回転ヘラ削り調整。底部外面1／3（底部中央）、未調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：内−灰色、外−暗灰色。胎土：密。3㎜以下の長石を若干含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：9／10。内面一部灰かぶり。底体部外面に粘土塊付着。

器種	図面 図版	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯 身	16－66 11－23	口径 11.0 受部径 13.6 器高 3.7 たちあがり高 0.8 たちあがり角度 34° 30'	たちあがりは内傾してのび端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部はやや浅く、底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面1／2、回転ヘラ削り調整。底部外面1／3（底部中央）、未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰色。 胎土：密。2㎜以下の長石をわずかに含む。 焼成：良好。残存：8／9。 受部上面に杯蓋口縁部の破片が熔着。 底体部外面灰かぶり。
同 上	16－67 11－24	口径 11.7 受部径 14.2 器高 3.5 たちあがり高 0.7 たちあがり角度 46° 00'	たちあがりは内傾したのち端部付近でやや上内方にのびる。口縁端部はやや丸くおさめる。 受部はやや外上方にのび、上面でやや凸面を成し、端部は丸くおさめる。 たちあがり基部内面であまい段を成す。 底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面4／5、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：灰色。 胎土：密。2㎜以下の長石を若干含む。チャートを含む。焼成：良好。 残存：ほぼ完形。受部上面に杯蓋口縁部片が熔着。底体部外面灰かぶり。 底体部外面に窯壁片付着。
同 上	16－68	口径 10.1 受部径 12.8 器高 3.3 たちあがり高 0.6 たちあがり角度 51° 30'	たちあがりは内傾したのち中位で上方にのびる。 口縁端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面2／3、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰青色。 胎土：密。3㎜以下の長石を含む。 チャートを含む。 焼成：良好。 残存：2／5。反転復元。
同 上	16－69 11－25	口径 11.0 受部径 13.2 器高 4.3 たちあがり高 0.9 たちあがり角度 24° 45'	たちあがりは内傾したのち中位でやや上方にのびる。口縁端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、上面でやや凸面を成し、端部は丸くおさめる。 底体部はやや浅く、底部は平ら。 全体に焼け歪む。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面3／4、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：内－灰色、外－暗灰色。胎土：密。2㎜以下の長石を若干含む。焼成：良好。 残存：ほぼ完形。合成復元。内面・外面一部灰かぶり。底部内面に粘土塊が付着し、その上に土器片が付着。
同 上	16－70	口径 11.0 受部径 13.7 器高 3.0 たちあがり高 0.6 たちあがり角度 54° 00'	たちあがりは内傾したのち中位で上内方にのび端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部は平ら。 底部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面3／5、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰色。 胎土：密。2㎜以下の長石を含む。 焼成：良好。 残存：4／5。底体部内外面に窯壁片付着。
同 上	16－71	口径 10.8 受部径 14.0 残存高 3.0 たちあがり高 0.7 たちあがり角度 57° 30'	たちあがりは内傾したのち端部付近でやや上内方にのびる。口縁端部は丸くおさめる。 受部はやや外上方にのび、端部は丸くおさめる。 たちあがり基部内面であまい段を成す。 底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面2／3、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰青色。 胎土：密。3㎜以下の長石を含む。 チャートを含む。 焼成：良好。 残存：1／8。反転復元。

器種	図面 図版	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯身	16−72 11−26	口径 11.2 受部径 14.0 器高 3.5 たちあがり高 0.8 たちあがり角度 43° 15'	たちあがりは内傾したのち中位でやや上内方にのびる。口縁端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 たちあがり基部内面で非常にあまい段を成す。 底体部は浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面6／7、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰青色。 胎土：密。5㎜以下の長石をやや多く含む。チャートを含む。 焼成：良好。残存：9／10。 内外面一部灰かぶり。
同上	16−73	口径 12.7 受部径 15.0 器高 3.1 たちあがり高 0.9 たちあがり角度 27° 45'	たちあがりは内傾してのび端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部は平ら。 底部は焼け歪む。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰色。胎土：密。2㎜以下の長石を若干含む。チャートを含む。 焼成：良好。 残存：9／10。受部上面に杯蓋口縁部片熔着。底体部外面一部灰かぶり。 底体部外面に粘土塊が付着。
高杯蓋	16−74	口径 13.0 つまみ径 2.4 器高 4.7 つまみ高 0.9	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部はやや低くやや丸い。 天井部外面中央に扁平なつまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面3／4、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：内一灰青色、外一暗灰色。胎土：粗。5㎜以下の長石を多く含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：2／3。

—第5表— 今熊1号窯焼成部攪乱坑内出土遺物観察表

器種	図面 図版	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯蓋	17−75 11−27	口径 16.0 器高 4.3	体部・口縁部は下外方に下る。 口縁部内面にあまい段を成し、口縁端部は丸くおさめる。 天井部はやや低く平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面3／4、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一暗灰色、外一灰青色。 胎土：密。4㎜以下の長石を含む。 焼成：良好。残存：3／4。
同上	17−76	口径 18.4 器高 4.2	体部・口縁部は下外方に下る。 口縁部内面に非常にあまい段を成し、口縁端部は丸くおさめる。 天井部は低く平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面1／2、回転ヘラ削り調整。口縁部外面ハケ目調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：暗灰色。 胎土：密。2㎜以下の長石を含む。 焼成：良好。 残存：1／5。反転復元。
同上	17−77	口径 18.8 残存 3.6	体部・口縁部はやや内彎して下外方に下る。 口縁端部は丸くおさめる。 天井部は低く平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面6／7、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：暗灰紫色。胎土：密。1㎜の長石をわずかに含む。焼成：良好。残存：1／5。 残存：1／5。反転復元。
同上	17−78	口径 15.8 残存高 4.4	体部・口縁部は下外方に下る。 口縁部内面に非常にあまい段を成すが全周しない。口縁端部は丸くおさめる。 天井部はやや低く丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面4／5、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：内一淡灰色、外一灰色。胎土：密。1㎜の長石を若干含む。焼成：良好。 残存：1／6。反転復元。
同上	17−79	口径 16.2 残存高 3.2	体部は下外方に下り、口縁部はやや下方に下る。 口縁部内面に非常にあまい段を成し、口縁端部は丸くおさめる。 天井部は低い。天井部上半欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面4／5、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：淡灰橙色。胎土：密。2㎜以下の長石をわずかに含む。焼成：不良。 残存：1／8。反転復元。

器種	図面 図版	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯 蓋	17－80	口径　14.1 残存高　3.9	体部・口縁部は下外方に下る。 口縁部内面に非常にあまい段を成し、口縁端部は丸くおさめる。 天井部はやや低く平ら。天井部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：淡灰色。胎土：密。2㎜以下の長石を若干含む。焼成：良好。 残存：1／8。反転復元。
同 上	17－81	口径　14.7 残存高　3.2	体部・口縁部はやや内彎して下外方に下る。 口縁部内面に非常にあまい段を成し、口縁端部は丸くおさめる。 天井部は低い。天井部上半欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面5／6、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：淡灰色。胎土：密。1㎜の長石をわずかに含む。焼成：良好。 残存：1／10。反転復元。
同 上	17－82	口径　15.8 残存高　4.1	体部・口縁部は下外方に下る。 口縁端部は丸くおさめる。 天井部は低く平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ削り調整 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：灰色。胎土：密。2㎜以下の長石を若干含む。焼成：良好。 残存：1／7。反転復元。
同 上	17－83	口径　13.0 残存高　4.5	体部・口縁部は下外方に下る。 口縁端部は丸くおさめる。 天井部はやや低くやや丸い。 天井部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面7／9、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：灰色。胎土：密。2㎜以下の長石を若干含む。チャートを含む。焼成：良好。 残存：1／4。反転復元。
同 上	17－84	口径　13.2 器高　3.3	体部は外下方に下り、口縁部は下外方に下る。 口縁端部はやや丸くおさめる。 天井部は低くやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面7／8、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：灰色。胎土：密。2㎜以下の長石を含む。焼成：良好。残存：2／3。一部反転復元。外面灰かぶり。天井部外面に甕の破片が付着。
同 上	17－85	口径　13.0 器高　3.1	体部は外下方に下り、口縁部は下外方に下る。 口縁端部は丸くおさめる。 天井部は低く平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面3／4、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：灰色。胎土：密。直径5㎜の長石を1含む。直径2㎜以下の長石を含む。焼成：良好。残存：2／5。合成復元。
同 上	17－86	口径　13.6 残存高　3.7	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。 口縁端部は丸くおさめる。 天井部は低い。天井部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面7／8、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：内－灰色、外－暗灰色。胎土：密。1㎜の長石を含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：1／5。反転復元。
同 上	17－87	口径　13.6 器高　3.9	体部は下外方に下り、口縁部はやや下方に下る。 口縁端部は丸くおさめる。 天井部は低く平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面7／8、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：灰色。胎土：密。2㎜以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：3／5。 外面一部に自然釉付着。
杯 身	17－88 11－28	口径　11.8 受部径　13.8 器高　3.6 たちあがり高　0.9 たちあがり角度　31°15'	たちあがりは内傾したのち端部でほぼ直立し、端部はやや鋭い。 受部はほぼ水平にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰色。胎土：密。2㎜以下の長石を若干含む。 焼成：良好。残存：8／9。一部反転復元。内外面灰かぶり。外面に粘土塊付着。底体部内面に土器片付着。

器種	図面 図版	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯 身	17−89	口径 13.8 受部径 16.6 残存高 3.4 たちあがり高 0.8 たちあがり角度 45° 00'	たちあがりは内傾してのび端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部は平らに近い。 底部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面7／8、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰色。 胎土：密。2㎜の長石をわずかに含む。焼成：良好。 残存：1／8。反転復元。
同 上	17−90	口径 13.0 受部径 15.8 残存高 3.9 たちあがり高 0.7 たちあがり角度 42° 00'	たちあがりは内傾したのち端部付近で上方にのび、端部はやや丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅い。底部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面5／6、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：灰青色。 胎土：密。2㎜以下の長石を若干含む。チャートを含む。 焼成：良好。 残存：1／6。反転復元。
同 上	17−91 11−29	口径 10.0 受部径 13.0 器高 4.0 たちあがり高 0.6 たちあがり角度 51° 15'	たちあがりは内傾したのち低位で上内方にのび端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、上面でやや凸面を成し、端部は丸くおさめる。 底体部はやや浅く、底部はほぼ平ら。 全体に焼け歪む。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面2／3、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内−灰色、外−暗灰色。 胎土：密。3㎜以下の長石を若干含む。焼成：良好。 残存：9／10。 外面灰かぶり。
同 上	17−92	口径 12.5 受部径 15.0 残存高 3.5 たちあがり高 1.1 たちあがり角度 33° 30'	たちあがりは内傾してのび端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部は平ら。 底部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面5／6、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：内−灰色、外−暗灰色。胎土：密。2㎜以下の長石を含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：2／5。合成復元。たちあがり外面・受部上面灰かぶり。底体部外面に粘土塊付着。
同 上	17−93	口径 12.0 受部径 15.0 残存高 2.9 たちあがり高 0.6 たちあがり角度 52° 30'	たちあがりは内傾したのち低位で上内方にのび端部はやや丸くおさめる。 受部は外上方にのび、上面でやや凸面を成し、端部は丸くおさめる。 たちあがり基部内面で段を成す。 底体部は浅く、底部はほぼ平ら。 底部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面3／4、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰色。 胎土：密。2㎜以下の長石を若干含む。焼成：良好。 残存：2／5。反転復元。 底体部外面に粘土塊・土器片が付着。
同 上	17−94	口径 10.0 受部径 12.6 残存高 3.8 たちあがり高 0.7 たちあがり角度 47° 00'	たちあがりは内傾したのち中位でやや上内方にのび、端部はやや丸くおさめる。 受部は外上方にのび、上面で凸面を成し、端部は丸くおさめる。 底体部は浅い。底部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面2／3、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰色。 胎土：密。2㎜以下の長石をわずかに含む。焼成：良好。 残存：1／10。反転復元。 外面灰かぶり。

器種	図面 図版	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
高杯杯部	17－95 11－30	口径 12.7 受部径 16.4 基部径 4.8 残存高 5.3 たちあがり高 1.2 たちあがり角度 35°30'	たちあがりは内傾したのち中位で上内方にのび端部はやや丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部はやや浅く、底部は平らに近い。 脚部は基部から下方に下るがほぼ全損する。 2段3方向に長方形スカシを有すると思われる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面7／8、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：暗灰色。 胎土：密。2㎜以下の長石を若干含む。焼成：良好。 残存：杯部の3／4。 外面灰かぶり。 底体部外面に粘土塊付着。
鉢	17－96	口径 20.2 残存高 5.5	口縁部はやや内彎して上外方に開き、端部は丸くおさめる。体部は下内方に下る。 口縁部・体部境界内面で段を成して、蓋を受ける受部とする。底部欠損。	ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	色調：やや黄色がかった乳白色。 胎土：密。焼成：良好。 残存：口縁部の1／12。反転復元。 内面受部以外に乳白色の施釉。 瀬戸美濃系。

—第6表— 今熊1号窯焼成部流入土内出土遺物観察表

器種	図面 図版	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯蓋	18－97	口径 15.6 残存高 4.1	体部・口縁部は下外方に下る。 口縁端部は丸くおさめる。 天井部は低く平ら。 天井部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面5／6、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：内－暗灰褐色、外－暗灰色。胎土：密。1㎜の長石を含む。焼成：良好。 残存：1／5。反転復元。
同上	18－98	口径 14.9 残存高 3.7	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。 口縁端部は丸くおさめる。 天井部は低い。天井部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面2／3、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：暗灰色。 胎土：密。1㎜の長石をわずかに含む。焼成：良好。 残存：1／6。反転復元。
同上	18－99	口径 12.6 残存高 3.6	体部・口縁部は下外方に下る。 口縁端部は丸くおさめる。 天井部は低く平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面6／7、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：暗灰色。 胎土：やや粗。3㎜以下の長石を多く含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：2／3。一部反転復元。 天井部外面に重ね焼き痕あり。 内面灰かぶり。
同上	18-100	口径 13.6 残存高 4.1	体部・口縁部は下外方に下る。 口縁端部は丸くおさめる。 天井部はやや低い。天井部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面3／4、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：灰色。 胎土：密。1㎜の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1／6。反転復元。外面に粘土塊付着。
杯身	18-101	口径 12.0 受部径 15.2 器高 3.9 たちあがり高 0.6 たちあがり角度 56°15'	たちあがりは内傾したのち上内方にのびる。 口縁端部はやや丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅い。底部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面4／5、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰色。 胎土：密。1㎜の長石を若干含む。 焼成：良好。 残存：1／5。反転復元。 外面灰かぶり。

器種	図面図版	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯身	18-102	口径 12.0 受部径 14.6 残存高 3.8 たちあがり高 0.9 たちあがり角度 37° 00'	たちあがりは内傾してのび端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平らに近い。底部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面4／5、回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：暗灰色。胎土：密。5㎜の長石を1含む。1㎜の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1／5。反転復元。
同上	18-103	口径 11.0 受部径 13.6 器高 3.6 たちあがり高 0.7 たちあがり角度 48° 00'	たちあがりは内傾したのち低位で上内方にのび端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平らに近い。底部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面9／10、回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：灰色。胎土：密。3㎜以下の長石を含む。焼成：良好。残存：1／6。反転復元。内面一部灰かぶり。
提瓶	18-104	口径 —— 基部径 9.0 体部最大径 20.3 残存高 17.4	口頸部欠損。肩部・体部・底部は正面で球形を成し、側面でやや角張った楕円形を成す。底部・背面全域欠損。肩部に先端がやや扁平な下方へ屈曲する左右一対の把手を付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。肩部・体部・底部前面外面、カキ目調整。肩部・体部・底部背面外面、カキ目調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：内－灰色、外－暗灰色。胎土：密。2㎜以下の長石を含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：1／7。反転復元。肩部・体部背面の外面に自然釉付着。肩部・体部側面の外面に土器片が付着。

陶邑窯跡群93－２区発掘調査報告

大阪狭山市山本北1297番地10号に位置する。当該地は、陶器山丘陵の北東に形成された高位段丘上に立地する。この高位段丘の支谷や高位段丘崖には５世紀後葉以降に多くの須恵器窯が造営され、陶邑窯跡群陶器山支群の一部を形成している。この中には、その出土遺物が須恵器編年の基準資料の一つとされているＭＴ15号窯[1)]や、山本１号窯（ＭＴ252号窯）[2)]がある。

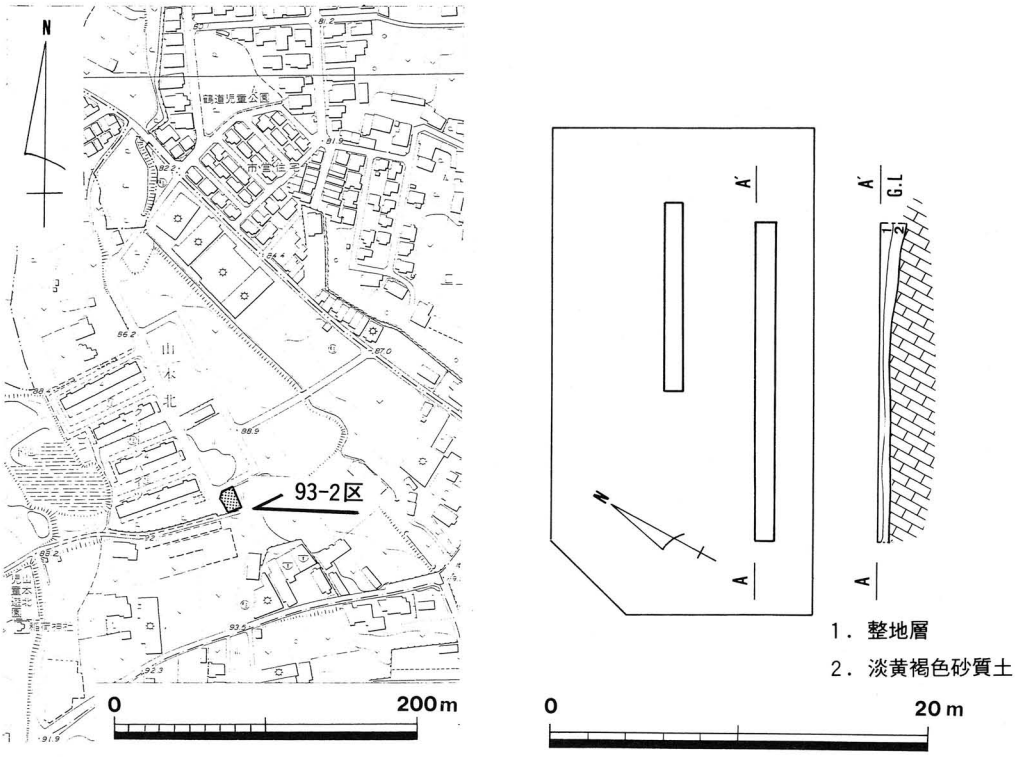
当該地は高位段丘面の東端の段丘崖に近く、未確認の窯跡やそれにともなう遺構などが検出される可能性があるために、個人住宅の建設に先立って事前発掘調査を実施した。

開発用地の中央および南側で東西方向に試掘溝を設け、平面掘削を行いながら土層断面の観察を行なった。現地表面から15cm～30cmの深さまでは、この箇所を宅地造成した際のコンクリート塊まじりの盛土層であった。その下層に淡黄褐色砂質土層が厚さ20cm～60cmで堆積していた。その直下で明黄赤色礫質土の地山面があらわれる。

地山面および淡黄褐色砂質土層の上面において遺構の検出に努めたが、これを確認することはできなかった。また、淡黄褐色砂質土層中に遺物の包含は認められなかった。

註記１）田辺昭三「陶邑古窯址群Ｉ」『平安学園考古学クラブ研究論集』10、1968年

２）大阪狭山市教育委員会「山本１号窯発掘調査概要報告書」『大阪狭山市文化財報告書』１、1988年



第21図　陶邑窯跡群93―２区調査位置図

第７表　　報告書抄録

ふ り が な	おおさかさやましないいせきぐんはっくつちょうさがいようほうこくしょ４
書　　名	大阪狭山市内遺跡群発掘調査概要報告書４
副　書　名	
シリーズ名	大阪狭山市文化財報告書
シリーズ番号	１２
編 著 者 名	植田隆司・市川秀之
編 集 機 関	大阪狭山市教育委員会
所　在　地	〒５８９　大阪府大阪狭山市狭山１丁目2384－１　TEL.0723-66-0011
発行年月日	西暦　１９９４年　３月　３１日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
狭山藩陣屋跡	大阪府大阪狭山市狭山	27231	－	34度30分15秒	135度33分00秒	93—１区 19930517～19930519 93－２区 19930909～19930917 93－３区 19931220～19931224	7 40 15	個人住宅建設に伴う事前調査
東野廃寺	大阪府大阪狭山市東野	27231	－	34度30分45秒	135度33分00秒	93－１区 19931012～19931020	6	個人住宅建設に伴う事前調査
陶邑窯跡群今熊１号窯	大阪府大阪狭山市今熊１丁目	27231	－	34度29分45秒	135度32分30秒	93－１区 19931201～19931215	9	個人住宅建設に伴う事前調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
狭山藩陣屋跡	城館跡	江戸時代17世紀～18世紀	93-1区／溝：１条 土坑：４、柱穴：１	瓦片	
		江戸時代18世紀～19世紀	93-1区／平瓦列：１、柱穴４ 93-2区／溝：２条 土坑：１	93-1区／瓦片 93-2区／磁器：碗、染付：碗・皿、猪口、土師皿、土師壷、陶器、行平鍋、ミニチュア土釜、ミニチュア徳利、硯、摺鉢	93-2区／撃剣道場と屋敷地の区画を確認。
東野廃寺	社寺跡	白鳳期（93-1区は不明）	土坑：１、柱穴：６	なし	
陶邑窯跡群今熊１号窯	生産遺跡	古墳時代後期（６世紀後葉～７世紀初頭）	須恵器窯の焼成部	須恵器：蓋杯・高杯・提瓶	焼成床面ごとに、ＴＫ43型式～ＴＫ209型式の須恵器を検出。

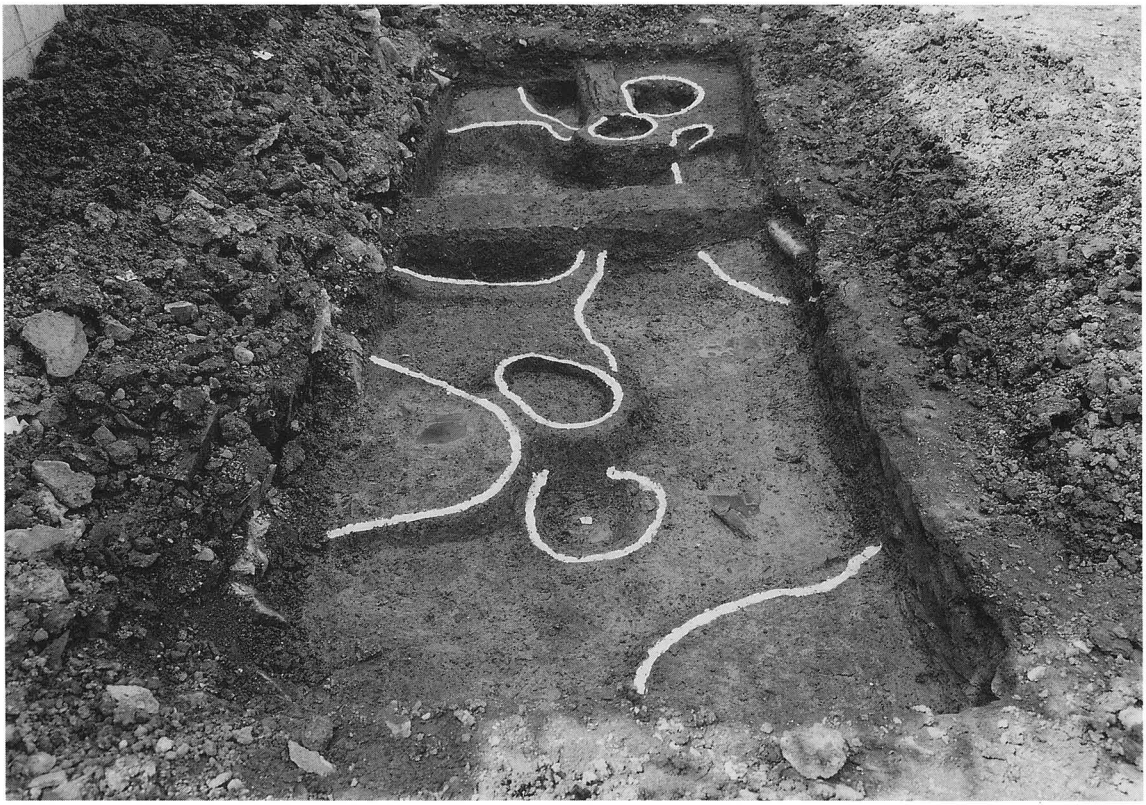
図　　版

図版1　狭山藩陣屋跡93—2区

a．遺　構

b．遺物出土状況

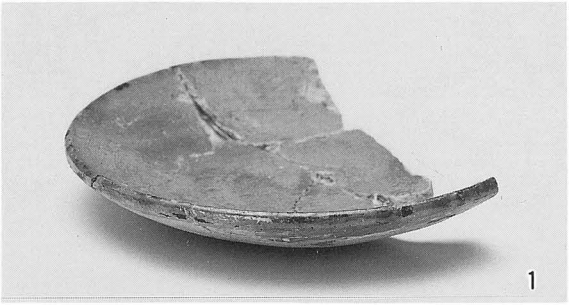
図版2　狭山藩陣屋跡93—1区・東野廃寺93—1区



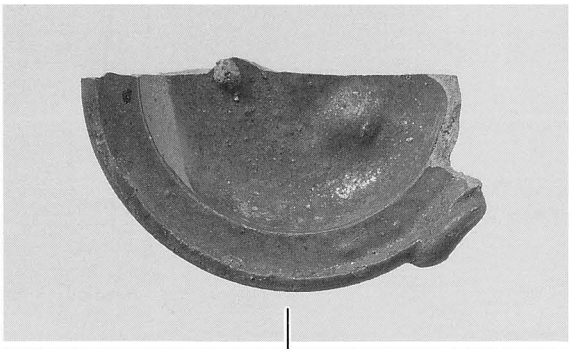
狭山陣屋跡93—1区

東野廃寺93—1区

図版3　狭山藩陣屋跡93—2区土坑出土遺物（1）


1

2

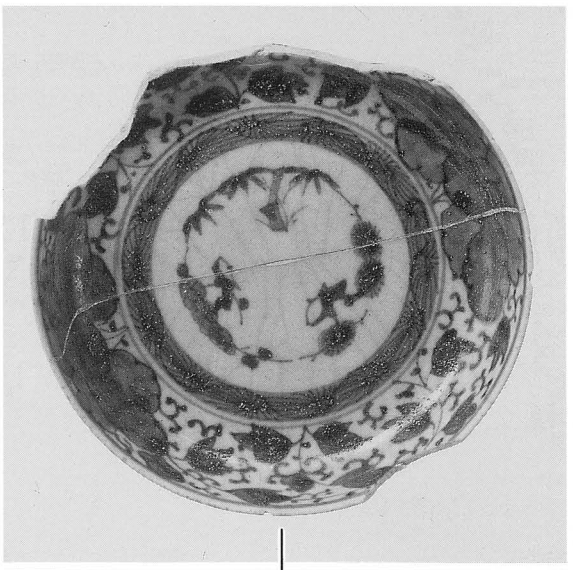


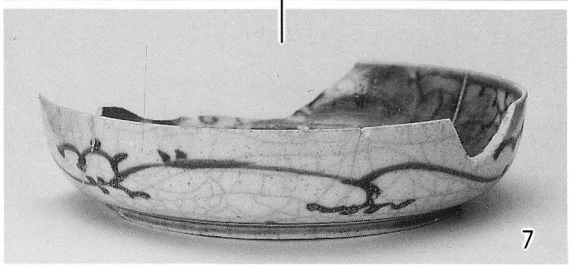
3

6

4

5




7

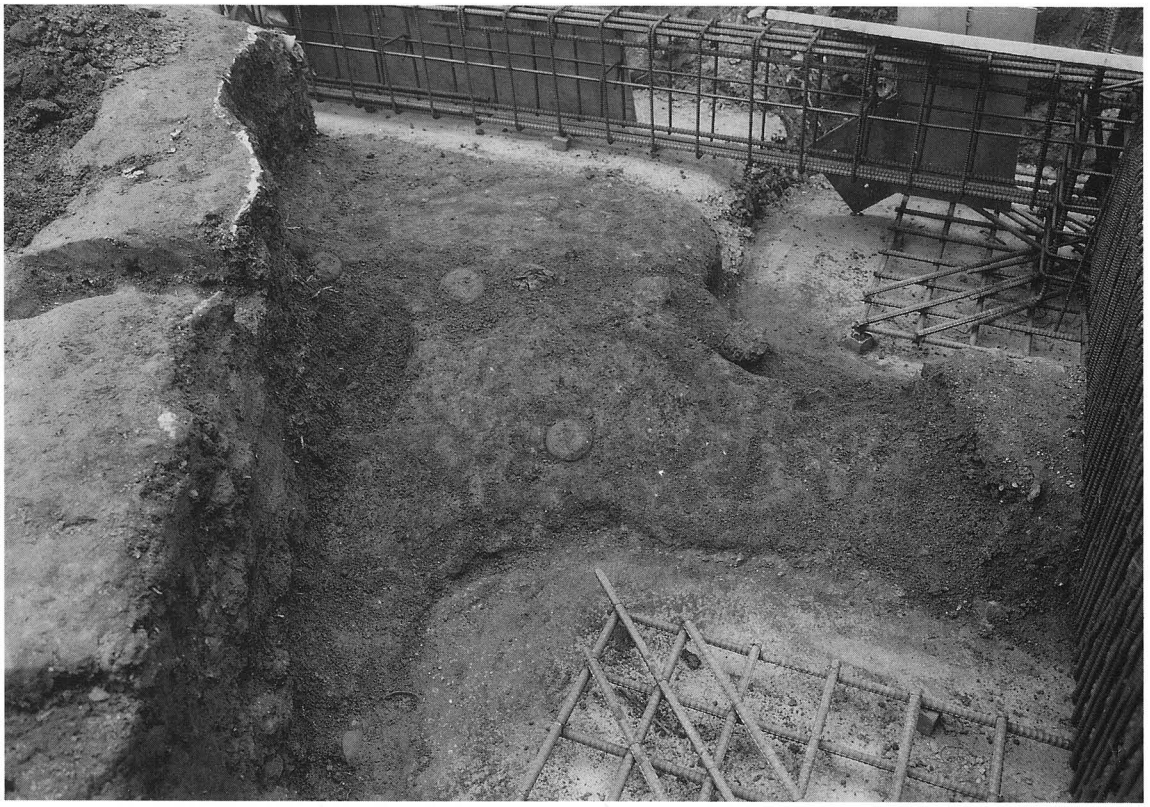
図版4　狭山藩陣屋跡93—2区土坑出土遺物（2）

図版5　今熊一号窯（1）

a．焼成部土層断面

b．第1次焼成床面

図版6　今熊一号窯（2）



a．第２次焼成床面

b．第２次焼成床面遺物出土状況

a．第3次焼成床面

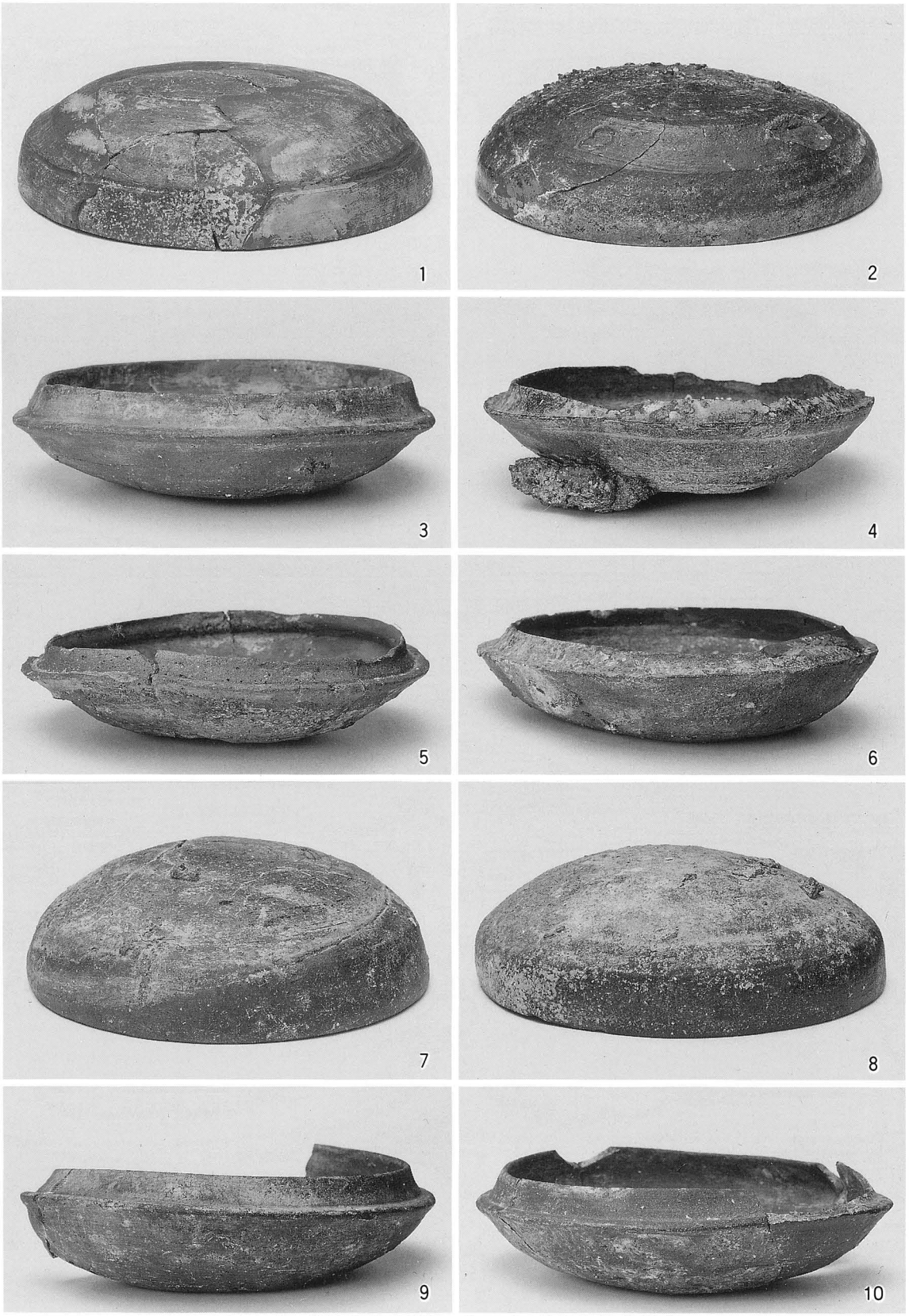
b．第3次焼成床面遺物出土状況

図版8　今熊一号窯（4）・陶邑窯跡群93—2区

今熊１号窯第３次焼成床面遺物出土状況

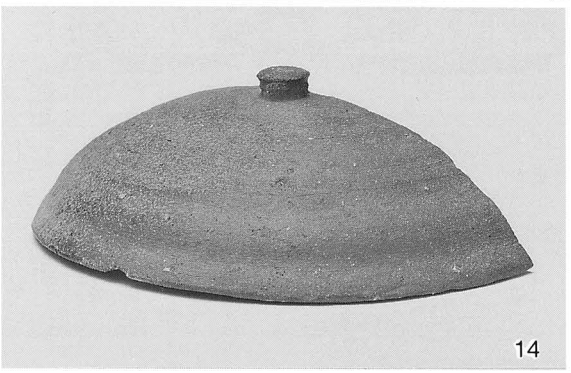
陶邑窯跡群93—２区

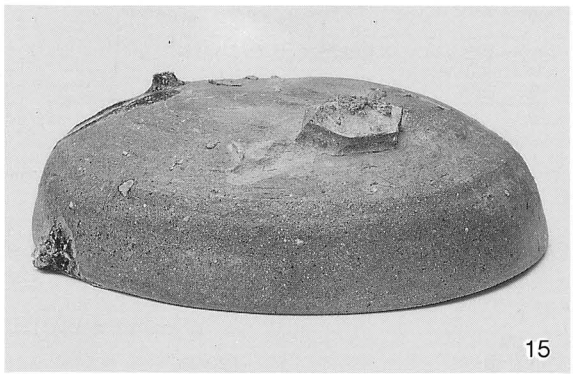
図版9　今熊一号窯出土遺物（1）



（1～6：第1次焼成床面、7～10：第2次焼成床面）

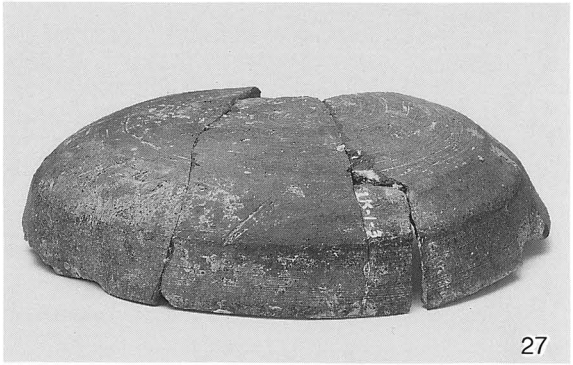
図版10　今熊一号窯出土遺物（2）

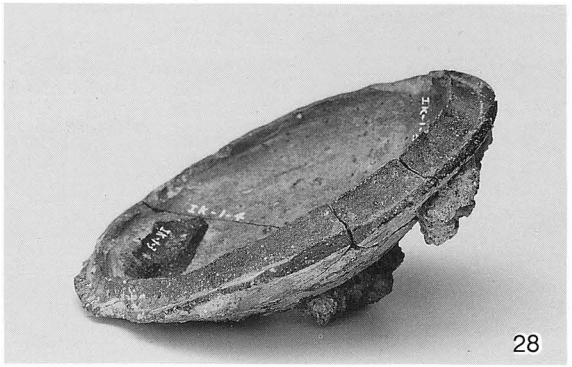


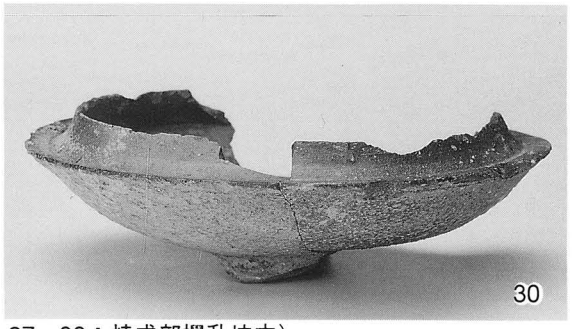


（11～14：第２次焼成床面、15～20：第３次焼成床面）

図版11　今熊一号窯出土遺物（3）







（21～26：第３次焼成床面、27～30：焼成部攪乱坑内）

大阪狭山市文化財報告書12

大阪狭山市内遺跡群
発掘調査概要報告書4

発行日　平成6年3月31日
発　行　大阪狭山市教育委員会
印　刷　橋本印刷株式会社
　　1　074548—2305(代)